

京	都	府
2・一 陶芸家団体 耀々会創立(新井謹也・河合栄之助・河村喜太郎・河村蟠山・楠部弥弼・八木一舂ら、昭4解散)。 京都工芸大観		展を開催)。 日出 5・26
3・4 凶画家 守住勇魚没(安政1・11・8徳島生、真如堂に葬る)。 川島織物社内誌 昭45・2		5・24 七宝工芸家 並河靖之没(弘化2・9京都生、享年83)。 京都美術協会雑誌 13、52、日本美術年鑑 1927
3・13、14 第4回青甲社展、岡崎第2勸業館に開催(西山翠嶂「蕭條」、堂本印象「瀟湘八景」、山内信一「早春」など)。 西山画塾 青甲社		5・一 陶芸団体、土に生きる会創立(木村二瓶子、岸村不空枝ら)。 日本美術年鑑 1929
3・一 太田喜二郎、黄海海戦実地踏査のため、大連に行く。 太田喜二郎遺作展図集		6・12 向陽会展、八坂倶楽部に開催(板倉星光・池田遙邨・徳岡神泉・川上拙次・上村松篁・山口華楊・案本一洋・前田荻邨・小早川秋声・佐藤光華ら出品)。 同上
4・22～5・20 国画創作協会第6回展、東京府美術館に開催。 日出 4・12、書画骨董雑誌 27		6・20 陶芸家 7代錦光山宗兵衛没(明1・2・16生)。 日出 6・21
4・24 京都美工院同人、徳称寺で会合を開き新設の帝展第4部美術工芸部審査委員6名中、京都側からは陶芸家清水六兵衛1人しか占められていないこと、さらに美術工芸審査に画家が加わることに對して反対を声明。 日出 4・25		7・1～3 市立絵画専門学校研究科第2回展、同校に開催(別室に菊池契月・入江波光・石崎光瑠らの所蔵品であるギリシャ・ローマ・イタリアの作品を陳列)。 日出 6・29
4・一 山鹿清華ら、美術工芸団体彩工会を設立。 日出 11・10、18		7・3 第2回十指展、祇園清々館に開催(同人：蒔絵井田宣秋・竹工岩森珍竹林・螺銅梶田蒼洋・篆刻河井章石・陶工吉村與四郎・木彫根本運泰・籃工中島運泰・金工黒井光珉・指物松本仙齋)。 日出 7・2
5・1 森本東閣塾友第1回小品展開催。 日出 4・28		7・23 京都裝飾芸術協会創立(岩佐有彩・岸本景春・山田江秀ら、互評会などを催す)。 日出 7・21、日本美術年鑑 1929
5・8～12 関西美術会展、京都商業会議所楼上に開催(出品者約300名、入選60点、工芸品は出品150点中22点入選。同人出品：川端弥之助「暮間」、黒田重太郎「水浴」、国松桂彦「ベコニア・レクス」、森脇忠「肖像」、太田喜二郎「雪」、沢部清五郎「山村の秋」、里見勝蔵「静物」、霜島正三郎「静物」、田中善之助「台南風景」、その他安井曾太郎・梅原龍三郎、新井謹也、河井寛次郎ら。 日出 5・8		9・12 関西美術院関係の同志集合し、白亜会結成準備会を開催(会則及び第1回展について協議、伊庭伝治郎・岩崎重雄・伊谷賢蔵・金沢主悦・中西房太郎・錦義一郎・竹内喜助・田口建次郎・谷川馨一・楊佐三郎・吉村勲)。第12回同展目録
5・13～15 第3回菊池塾展、第2勸業館に開催(宇田荻邨が審査、木村斯光「舞」、板倉星光「九臯」ら約80点出品)。 日出 5・5		10・5～17 第6回日本南画院展、岡崎第1勸業館に開催(池田桂仙・水田竹圃・水田硯山・河野秋邨・矢野橋村・小越松南・小室翠雲ら出品)。 日出 10・6
5・14 猪飼塾青竹会、市公会堂に開催。 日出 5・14		10・16～11・20 第8回帝展 ⁽¹⁾ (11・27～12・11京都陳列会を勸業館に開催)。 日本芸術院史
5・17～19 水田竹圃塾菁莪会第3回展、京都商業会議所に開催(水田竹圃「山水」、水田硯山「瀟峽」など出品)。 日出 5・14、18		10・24～11・7 日本自由画壇展 ⁽²⁾ 、岡崎第1勸業館に開催(東京展は10・1～6に開催)。 日出 9・18
5・21～23 国画創作協会第6回展 ⁽²⁾ 、岡崎勸業館に開催(出品点数第1部60点〔内訳会員18、会友10、入選32〕、第2部164、別に第2部推薦により、金子九平次の滞欧作彫刻絵画39点、富本憲吉の陶器200点を陳列。第1部犇牛賞：徳力富吉郎「人形とレモン」、第1部国画奨学金：三岡明。新会員に山脇信徳(洋)・金子九平次(彫)・富本憲吉(工)を、新会友に玉城末一・多田敬一・大橋孝吉(洋)・宮坂勝(洋)を加えた。ヌドラン=ワロキエを在外会員とした。4月 東京展、5月 大阪		11・5～7 第1回白亜会展、府立図書館に開催(会員12名、出品62点)。 第12回同展目録
		この年 ▷ 西村五雲、角屋の襖絵揮毫たのまれる。 日出 1・8 ▷ 柳宗悦、上加茂の古い社家の建物を一軒借りて、作家団体に上加茂民芸協団を作る〔青田五郎(織物)・鈴木実(染織)・青田七郎(金工)・黒田辰秋(木工)らと同居して手工芸にいそむ。2年後、柳の外遊中に解散〕。 民芸40年 ▷ 石黒宗磨、九谷から入浴、東山蛇ヶ谷に住み制作する。 毎日 昭35・1・26

参	考	日	本
(1)第8回帝展(京都関係のみ) 審査員 木島桜谷・西山翠嶂・川村曼舟・西村五雲・堂本印象・福田平八郎・水田竹圃・(洋)太田喜二郎・(工)清水六兵衛 審査員出品 堂本印象「春」、木島桜谷「灰燼」、水田竹圃「振衣濯足」、川村曼舟「嶺雲揺曳」、太田喜二郎「田植」、清水六兵衛「青華百日紅花瓶」無鑑査出品 宇田荻邨「溪澗」、福田平八郎「茄子」、徳岡神泉「後苑雨後」 特選受賞者 登内微笑「多武の峯春雪」、大河内夜江「たにまの春」、金島桂華「鳴九臯」、山口華楊「鹿」、案本一洋「蟬丸」、水田硯山「朝」、森守明「雨後」、村田勝四郎「少女像」、松田尚之「若き日のかげ」、山鹿清華「和蘭陀船」 日本芸術院史		3・7 東洋美術史家 大村西崖没(明1生、享年60)。 3・12 彫刻家 新海竹太郎没(明1生、享年60)。 4・22～5・15 朝倉塾第1回彫塑展。 5・1 洋画家 万鉄五郎没(明18生、享年43)。 28・4 春陽展に遺作特陳。 6・3～30 明治大正名作展(朝日新聞社主催、府美術館に開催)、絵画・彫刻の大代表作。 6・11～15 六趣園・五匠園の漆芸展、大阪三越呉服店に開催。 日出 6・11 6・14～16 第17回京都四園展(遊陶園・京漆園・道楽園・時習園)、東京丸ノ内商工奨励館に開催。 6・22～26 柳宗悦ら、はじめての「民芸」展を銀座鳩居堂に開催。 6・24 津田信夫ほか23名、帝国美術院美術展覧会委員となる。建島大夢・和田三造・山崎朝雲ら、帝国美術院会員となる。 9・3～10・4 第14回二科展、府美術館に開催(長谷川利行「麦酒室」など)。 10・16～11・20 第8回帝展、この年より第4部美術工芸部を設置。なお第2部に創作版画の受理をみとめる(百穂「新冬」、石井林響「野趣二題」、藤島「鉸剪屑」、院賞に錦木清方「築地明石町」、田辺至「裸婦」、横江嘉純「大乘」。 11・1 『世界美術全集』(～昭7・3、54巻平凡社、昭25より新版刊行)。 11・15～24 岸田劉生ら大調和会を結成。第1回展、日本美術協会に開催。 12・9 彫刻家 戸張孤雁没(明15生、享年46)	この年 ▷ 国画創作協会に工芸部が新設され、富本憲吉ら会員となる。
(2)第6回国画創作協会展 小野竹喬「波濤」「青海」、柳原紫峰「獅子」、土田麦麴「大原女」、野長瀬晚花「海近き町の舞妓」、浅野竹二「風景」、伊藤草白「庭」、伊藤柏台「松原菴」、池田昌克「風景(池)」、石橋謙吾「外房風景」、猪原寿「果樹」、於川龍人「雪村」、小川栄太郎「宮浦の秋」、大山更青「風景」、岡村宇太郎「鶯」、恩田耕作「出雲笠浦風景」、甲斐莊楠音「雪女(未成)」「娘」「母」「逃亡」、粥川伸二「北野緑日所見」「唄と踊」、川上澄生「風船のり(版画)」「秋の野の草(版画)」「煙管五本(版画)」「蛇莓(版画)」、河田賢三「郊外小景」、小松均「花」(2点)、佐原修一郎「風景」、柳原始更「鱸魚」「習作」「拓かれゆく丘」、沢田実「風景(一)(二)」、新見虚舟「海苔乾す早春」、吹田草牧「嵐山更秋」、杉田勇次郎「麓案」、多田敬一「黄昏」「丘」、高山精華「紀伊の海」、玉城末一「春」「団欒」、徳力富吉郎「人形」「人形とレモン」、長沢信一郎「郊外風景」、林司馬「山茶花」、半田鶴一「荻窪風景」、平塚運一「信州木崎(木口木版)」「牡丹(木口木版)」、福田豊四郎「瀟峽」、丸岡比呂史「牡丹」、三岡明「晩秋」、水谷浩象「春光」、村上志郎「冬」、森紅凝「児童園」、森谷南人子「夏海辺」「秋郊」「海近き村」、山下摩耶「習作」 第6回同展図録		▷(3)第7回日本自由画壇展 池田桂仙「山果野実」・「梅溪秋雨」、井口華秋「蠶蝦」・「鉄拐」・「即興2題」、林文塘「文珍菩薩」・「秋晴れ」・「新涼」・「秋圃」・「八瀬の遊園地」・「静物」・「静物」、西井敬岳「宇治川四題」、渡辺公観「湖畔の夕」・「斜陽」、玉舎春輝「萬寿山」、上田萬秋「林泉2題」・「野に山に6題」、松村梅叟「御所人形」・「菅生祭」・「夏の夕」・「鏡の前」、庄田鶴友「新秋」・「水墨山水」、廣田百豊「婦女12題」・「踊り」・「雪の清水」、久保寛「池」・「静物」、佐々木千早「芥」・「遊行一日」、和仁淵天崖「道頓堀」 日本自由画壇展覧会図録	
▷ 柳宗悦、『雑器の美』を刊行。 民芸40年 ▷ 洋画家 小山三造没(万延1 静岡生)。 京都洋画の黎明期 ▷ 同風印社(同人園田ら10名)、篆刻の芸術化運動を志す。 日出 5・17 ▷ 金島桂華、久邇宮御殿御杉戸に「双鶴」を揮毫。 金島桂華			

京	都	府
1・9	3代松風嘉定没(明3・10・16愛知県瀬戸生、享年59、洛東高台寺に葬る)。 松風嘉定、日出 1・10	崎公園第2勸業館に開催(出品は御物・工芸品126点、江戸絵190点、写真165点、書籍新聞・雑誌185点など)。 京都博覧協会史略
1・10	鹿子木孟郎、アカデミー鹿子木大阪画塾を始む(昭6・6まで)。 鹿子木孟郎小伝	4・14~16 霊山社小品展、清水石段下念々堂に開催。 日本美術年鑑 1929
2・1	橋本関雪、帰国。 日本美術年鑑 1929	4・21 第2回赤草社展(菊池契月塾中堅の組織する研究発表展)、八坂倶楽部に開催。 日本美術年鑑 1929、都市と芸術 昭3・4
2・11	南画家 田南岳璋没(享年53、明9・9三重生)。 同上	4・27~5・14 国画創作協会第7回展 ^{C2)} 、東京府美術館に開催(この回には1部・2部のほかに、彫刻・工芸を一般募集し、第1部中に版画室を設けた。出品点数第1部日本画40点〔内訳会員11、会友7、入選22〕、版画14点、洋画197点、彫刻16点、工芸25点)。 第1部 犇牛賞 四辻喜一郎「八百屋」 第1部 国画奨学金 徳力富吉郎・佐原修一郎・大橋孝吉を第2部会員に推薦する。 なお5月 京都展を岡崎勸業館に開催、6月 大阪展を大阪朝日会館に開催)。 中央美術
2・15	御大典大饗宴場を飾る悠紀主基地方風俗御屏風の揮毫を、大札準備委員会より、主基は山元春挙、悠紀は川合玉堂に任命。 同上	4・1 工芸春草会設立(新時代の工芸研究を目的とする、迎田秋悦・井田宣秋ら)。 日本美術年鑑 1929
3・6~11	京都画壇近作絵画展覧会、東京日本橋日俳芸術社画廊陳列所に開催。 都市と芸術 昭3・4	5・5、6 第6回青竹会試作展、岡崎公会堂に開催。 同上
3・10~12	第5回青甲社展、岡崎第2勸業館に開催(堂本印象「朝陽」、山内信一「鹿」、森守明「幽溪春興」、小川翠村「長養」など69点を出陳)。 日出 3・11、西山画塾 青甲社	5・11~15 黄玉会第2回展、府立図書館に開催。 同上
3・16~18	第4回菁莪会展、岡崎第1勸業館に開催。 日出 3・17、日本美術年鑑 1929	5・13~20 第4回京都美工学院展、熊野神社前に開催。 同上
3・17~21	第2回白亜会展、府立図書館に開催(出品作品50点、番外26点)。 第12回同展目録	5・25、26 津田青楓画塾第1回展、聖護院郵便局跡に開催。 同上
3・17~19	菊池塾第4回展、岡崎第2勸業館に開催(菊池契月「女」、宇田荻邨「林泉」、木村斯光「足利義満」、梶原緋佐子「古い」、松元道夫「春」、板倉星光「裸婦」、堀井香坂「阿呼」など89点出品)。 日出 3・17、日本美術年鑑 1929	5・26、27 土井撰美堂主催、諸名家近作展、京都美術倶楽部に開催(出品数150余点、京都から、竹内栖鳳「初夏の宵」、西山翠嶂「新緑塔影」、入江波光「竹に雀」、橋本関雪「永晝」、富田溪仙「扇流し」、菊池契月「打球」、堂本印象「花鳥十二題」、山元春挙「琵琶湖の春」、中村大三郎「舞妓」、西村五雲「曲馬」、村上華岳「牡丹」、土田麦麿「山吹」、福田平八郎「長閑」など出品)。 日出 5・25
3・20	土岐市長、全市議員を先斗町歌舞練場に招待し、美術館実現の方法につき協議。全会一致をもって、大札奉祝記念事業として、美術館新設の賛同を得る。美術館年報 昭8、日出 3・10	6・1~7 関西美術会展、京都商工会議所に開催(洋画総出品258点の中78点が入選、同人作品24点。工芸も。須田国太郎は「丘上の村」と題し滞欧作を発表。特別陳列、ロートレック、フリエス=バルツンの名画)。 日出 6・2
3・24~26	早苗会第29回展、岡崎勸業館に開催(川村曼舟「和歌浦」、小村大雲「汲清泉」、案本一洋「阿児」、庄田鶴友「暗香浮動」など86点出品)。 日本美術年鑑 1929	6・2~6 近藤浩一路個人展、三越に開催(水墨の試作54点を陳列)。 日本美術年鑑 1929
3・27	大札奉祝会発起人会が、市公会堂に開かれ、土岐市長ほか市内有力実業家、美術家が会合、100万円で美術館を建設し、資金を寄附にまつことを決定(9・1 大札記念京都美術館建設委員会規定が制定される)。 美術館年報 昭8	6・9~11 中沢博士古稀記念展、東京商工奨励館に開催(同展は中沢岩太の薫陶を受けた門下と周囲の園友が計画したものである)。 同上
3・一	金属工芸団体、金芸会創立(京都の美術工芸のうち金工が振わないため、その進歩向上を計る目的。同人は大西三四郎・黒井光珉・里村昌美・平野泰三・谷口藤兵衛・長谷川亀右衛門・溝口安太良ら。10・20~21 第2回試作展を祇園清々館に開催)。 日本美術年鑑 1929、日出 10・21	
4・1~22	京都美術協会主催明治文化博、岡	

参	考	日	本
(1)第9回帝展(京都関係のみ)	審査員 (日)西山翠嶂・(日)川村曼舟・(日)福田平八郎・(日)中村大三郎・(日)宇田荻邨・(洋)鹿子木孟郎・(工)清水六兵衛 会員出品 菊池契月「南波照間」 審査員出品 福田平八郎「菊」、中村大三郎「編物」、宇田荻邨「高雄の女」、鹿子木孟郎「田島博士」 無鑑査出品 伊東陶山・河村蜻山・迎田秋悦・山鹿清華 推薦となった人 水田硯山・登内微笑 特選 第1部 絵画 池田遙邨「雪の大阪」、堀井香坂「百万」、小川翠村「老園蓮春」、金島桂華「牡丹」、上村松篁「蓮池群鴛図」、矢野橋村「暮良蒼々」、山口華楊「猿」、案本一洋「饒春」、福田恵一「文覚」、広本進「赤目の溪谷」 第2部 絵画 井垣嘉平「稚き日」、坪井一男「晩夏」 美術工芸 沢田宗山「南蛮渡来」 日本芸術院史	3・24~5・6 フランス美術展(仏文化交換会主催、府美術館に開催)。 4・27~5・14 国画創作協会第7回展(竹喬「冬日帖」、川島「地下鉄道」。版画室新設・彫刻・工芸公募開始、富本憲吉・柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司らが主体となる。7月1部(日本画)解散、2部は国画会と改称)。 4・27~5・4 春陽会第6回展(版画室新設、未醒「羅馬物語」、木村荘八「パンの会」)。 6・6~25 浮世絵展、府美術館に開催。 6・一 第18回京都四園展、東京に開催(今回で終了)。 8・15 佐伯祐三、パリで没(明31生、享年31)。 8・24 帝国美術院規程中一部改正(会員を25名に増加、従来の美術展覧会委員制度を廃止、美術展覧会審査委員制度を設置)。 9・3~10・4 第15回二科展(安井曾太郎「花と少女」、佐伯「新聞屋」。また中山巍・東郷青児の滞欧作特陳、里見勝蔵「女」)。 9・一 川端龍子、院展を脱退する。 10・16~11・20 第9回帝展(契月「南波照間」、前田寛治「裸体」、青山「黄昏」)。 10・17 帝国美術院、附属美術研究所開所式挙行。 10・23 第9回帝展特選受賞者は、池田遙邨ほか45名。 11・27~12・7 第1回プロレタリア大美術展、府美術館に開催(矢部友衛「職場帰り」)。	この年 ▷ 商工省工芸指導所、仙台に設立。
(2)第7回国画創作協会展	入江波光「摘草」、小野竹喬「冬日帖」、榊原紫峰「冬朝」、土田麦麿「朝顔(未成)」、野長瀬晚花「奈良三題」、麻田弁次「百舌の雛(版画)」、浅野竹二「白帆遙映」、畦田正太郎「風景(版画)」、伊藤柏台「衣笠風景」、小野朱竹「霜日(版画)」、岡村宇太郎「栗」、荻原侍経「白毫寺秋景」、甲斐荘楠音「椿姫」、要樹平「風景」、亀井藤兵衛「黒い家の風景(版画)」、粥川伸二「休日」・「鏡袋など」、川上澄生「麦酒杯と煙管(版画)」・「万字人物(版画)」・「的(版画)」・「造花などの静物(版画)」・「鬼ごど(版画)」、川西英「曲馬(版画)」・「静物(版画)」・「途上(版画)」、木村揚昭「秋色」、小松均「雪」・「八瀬」、河野周耳「山間春景」、佐原修一郎「秋の庭」、榊原始更「幽庭」、沢田実「風景」、新見虚舟「三人の鮮人」・「漁港」、吹田草牧「醍醐寺泉庭」、杉田勇次郎「春厨蔬菜」・「暮愁」、多田敬一「椿」、玉城末一「少女」・「金魚」、徳力富吉郎「初冬」・「茄子」、中川伊三郎「日車」、林司馬「花鳥図」、平塚運一「木崎湖(版画)」・「百日草(版画)」、福田豊四郎「雪の一日」、三岡明「蕃茄」、村上志郎「廃屋」、森谷南人子「田園夏日」・「海辺(曇)」、四辻喜一郎「八百屋」・「夜店」・「私ノ生活」第7回同展目録		

京	都	府
6・10～15 堂本印象第3回個展、大阪高島屋に開催(近作20点出品)。日本美術年鑑 1929		生(版)・粥川仲二・甲斐荘楠音・四辻喜一郎・小川竹枝・小野朱竹(版)・丸岡比呂史・福田豊四郎
6・28～30 蒼生社展四条大丸に開催(福田平八郎・小松均・大矢峻嶺・衣笠鮎荘らが出品)。日出 6・29		・小松均・浅野竹二・沢田石民・佐原修一郎・榊原始更・三岡明・平塚運一(版)・森谷南人子・杉田勇次郎・吹田草牧。賛助員:入江波光・土田麦僊・村上華岳・野長瀬晚花・小野竹喬・榊原紫峰)。日出 12・8
7・1～3 市立絵専研究科第3回展、同校に開催。同上		12・5～10 白亜会小品展、画箋堂に開催。第12回同展目録
7・15 九名会展、八坂倶楽部に開催。都市と芸術 昭3・7		この年
7・30 国画創作協会、第1部同人13名、東京帝国ホテルにおいて解散式を挙げる。第2部は一旦解散したが梅原龍三郎を中心にさらに国画会として継続を声明。新たに椿貞雄・河野通勢・高村光太郎を会員に加える。日本美術年鑑 1929		▷ 林重義渡仏。日本美術年鑑 昭19-21
8・14 渋沢子爵より依頼された竹内栖鳳筆「雨霽」完成し、関係者に公開。日出 8・14		▷ 神阪雪佳の原図案で、京都美工院会員合作の「飾花車」完成(同作品は奨美会所有となり、後年日本政府より、ドイツ総統ヒットラーに贈呈)。雪佳遺作集
9・13～17 第3回白亜会展、府立図書館に開催(出品作品41点、新たに渡辺造酒三会員となる)。第12回同展目録		▷ 川北霞峰塾蒼窮社第1回展開催。京都に於ける日本画史
9・20～12・25 大礼記念京都大博覧会(京都市主催)開催。大礼記念京都大博覧会誌		▷ 西山翠嶂、今上天皇即位の大典に際し御下命画「春曙」、久邇宮家より御即位の大典に際し御下命画「月下群鷗」を描く。日本美術年鑑 昭34
10・16～11・20 第9回帝展 ⁽¹⁾ (水田硯山・登内徹笑が推薦となる。11・27～12・11京都陳列会を市立絵画専門学校に開催)。日本芸術院史		▷ 秋、津田青楓、津田塾画室を鹿ヶ谷に完成(幹事西村五郎、昭5、東京塾を杉並町天沼に設立)。市美術館ニュース 43、日本の前衛絵画
10・25 山元春挙筆御大典主基御屏風が完成。都市と芸術山元春挙先生追悼号		▷ 入江波光、国画創作協会の解散後、画壇を離れて独自の制作と古画の模写に専念する。入江波光展目録
10・一 怡園、左京区南禅寺下河原町に完成(2月着工、設計者は造園師小川治兵衛、築山林泉庭)。京都の明治文化財		▷ 菊池契月、沖縄地方を旅行。また御用画「若菜、着綿」を描く。日本美術年鑑 昭31
10・一 日本自由画壇展、 ⁽²⁾ 日本南画院展開催。		
11・3 昭和工芸協会創立(工芸美術の研究発表、向上を計る目的で設立。事業として研究会・講演会・展覧会・機関雑誌発行を計画)。日本美術年鑑 1929、日出 10・25		
11・8 高山彦九郎銅像除幕式、三条橋畔に開催。日出 11・9		
11・12 文学博士深田康算没(明11山形市生、享年51)。日本美術年鑑 1929		
11・18～20 第6回京都美工院展、南禅寺金地院に開催(出品総数60余点、「香炉・鳥の子青瓷銀舎」伊東陶山、「木彫・実るころ」石本曉海、「重硯箱・南天模様」迎田嘉亭、「菓子器・白青瓷」楠部弥弍など)。日出 11・18		
11・一 もとの国画創作協会第一部会員ら26名、新樹社を設立(会員:伊藤柏台・伊藤草白・石橋謙吾・石川利治・半田鶴一・徳力富吉郎・岡村宇太郎・於川竜人・恩田耕崖・川西英(版)・川上澄		

参	考	日	本
(3)第8回自由画壇展覧会			
池田桂仙「温泉湯山春雨」・「勸学歌図」、井口華秋「日天月天」、林文塘「雨二題」・「文楽所見」、西井敬岳「磐梯山秋趣」、渡辺公観「許宣平」・「悠紀田の夏」・「主基田の秋」、玉舎春輝「耶馬溪」・「鱈魚」、上田萬秋「磯馴そ松」・「錦雉」、松村梅叟「小女三題」・「ダリヤ」・「柘榴」、庄田鶴友「笠置山の秋」・「秋の夜」、廣田百豊「婦女12題」・「うずら」・「鼓持つ舞妓」、久保寛「小供」、和仁淵天崖「鵜舟」、佐々木千早「寧楽余情」、			
「京の祭(祇園祭)」・「祇園神社」池田桂仙、「稚子」松村梅叟、「宵山」井口華秋、「鉢」林文塘、「絃召せ」玉舎春輝、「御輿払ひ」庄田鶴友、「京の祭(葵祭)」・「下鴨神社」西井敬岳、「御車」上田萬秋、「競馬」渡辺公観、「勅使」廣田百豊、「花傘」庄田鶴友、「秦楽」玉舎春輝			
			日本自由画壇展覧会図録

京	都	府
<p>1・一 陶芸家団体耀々会、自由な研究の進路を辿ろうと解散。 日出 1・23</p> <p>1・一 京都モスリン図案家連盟創立。 図案年鑑 1</p> <p>1・一 京都創作版画協会創立。2・1～5 第1回展を大丸に開催(会員出品作約30点、その他参考品として足利時代以前の古版画約40点を陳列、印仏・擢仏・紋様類など)。 日出 1・30</p> <p>2・2 京都に本社をもつ3新聞社の各美術担当記者、美術工芸界の実状の研究と刷新向上を計るべく、二日会を結成、共同一致の行動を取ることを決める(京華・福井佐太郎、京日・徳見松太郎、日出・藤本京一)。 日出 2・6</p> <p>2・7 5月から開催のバリの日本美術展、京都側出品中、搬入された工芸品約100点につき、岡崎工芸館で軽い鑑別がおこなわれる(64点を選出、清水六兵衛・伊東陶山・河村蜻山・山鹿清華・迎田秋悦・沢田宗山など)。 日出 2・5</p> <p>2・9 京都美工学院、新たに7人の同人を推薦。新旧同人27名は、洛西嵯峨野の神阪雪佳宅に参集(新同人は堂本五三良・迎田嘉一郎・高橋清山・伊東翠壺・魚野自醒・奥村霞城・皆川月華)。 同上</p> <p>2・17～20 下鴨在住60余名の有名無名作家の、第3回下鴨画家展、大丸に開催(今回はすべて尺八横物の一定制作、福田平八郎・鹿子木孟郎・不動立山・小早川秋声ら出品)。都市と芸術 昭4・3</p> <p>3・1 京都審美絵画研究所、北白川別当町76にアトリエを建設。同時に北白川絵画研究所と改名、研究を開始。 日出 3・8</p> <p>3・15～17 日本民芸品展、日本民芸美術館の主催で、大阪毎日新聞京都支局に開催。 民芸品展目録、民芸40年</p> <p>3・20～25 第4回白亜会展、府立図書館に開催(出品作品46点、小品24点、本日より大阪毎日新聞社京都支局の後援となる。11・30～12・4 第5回展を京都商工会議所に開催)。 第12回同展目録</p> <p>3・30 日本画家 畑仙齡没(享年66)。 日本美術年鑑 昭4</p> <p>4・1 京都高等工芸学校、陶磁器科を新設。第1学年の入学を許可。 実業教育50年史</p> <p>4・1～7 近代染織品陳列会、高島屋呉服店に開催(蝸牛村同人の図案を西陣の岡本恒三郎が染織した作品を出品)。 都市と芸術</p> <p>4・一 2代伊東陶山・山鹿清華・宮永東山ら、朝鮮・支那・満州の古美術研究のため出発(約1カ月間)。 宮永東山自筆履歴書、日出 2・28</p>	<p>4・一 植田寿蔵、深田康算のあとを受けて、京大文学部美学美術史講座主任教授となる(独自の美学体系と豊富な芸術体験とに基づき、芸術の自律的研究の立場を樹立、美学史上大きな功績をもたらす。昭21・7 退官)。 京都大学70年史</p> <p>4・一 柳宗悦、同志社大学講師を辞任し、ラングドン=ワーナーの推薦により、米國ハーバード大学講師として渡欧米(昭5・7 帰国)。 民芸40年</p> <p>5・10～12 菊池塾展第2勸業館に開催(出品数120余点、菊池契月「桜」、岡本神草「臥女」、菊池隆志「静物」、宇田荻邨「吉野山」、堀井香坡「木蓮」、登内微笑「綬雞」など出品)。 都市と芸術 189</p> <p>5・11～13 菁莪会展、第1勸業館に開催(水田竹圃「幽棲」・「薩摩富士」、水田硯山「雨湖」・「霜林」など約52点出品)。 同上</p> <p>5・17～19 青竹会展、第1勸業館に開催(45点出品、猪飼嘯谷「家康」を出品)。 都市と芸術 191</p> <p>5・19、20 青甲社第6回展、岡崎第2勸業館に開催(西山翠嶂「乍蔭乍晴」、堂本印象「頂相を描く」、山内信一「春暖」、上村松篁「水魚二題」、森守明「春」など出品)。 都市と芸術 191、西山画塾青甲社</p> <p>5・23～27 津田青楓塾第2回展、聖護院郵便局跡に開催(出品は塾生の作品約130点、西村五郎・津田正豊・津田正周・徳永玉樹・水谷川忠磨・竹内満佐子、その他津田青楓の近作、近藤悠三の陶器、安達健児蕨縹壁掛など陳列)。 日出 5・18</p> <p>6・1～5 第1回新樹社展、第2勸業館に開催(伊藤草白「海辺」、甲斐莊楠音「奴」・「道行」、徳力富吉郎「少女」、川西英「金魚」など旧国展の新人が39人、73点を出品、他に賛助出品として、榊原紫峰「鳥獣のスケッチ」、入江波光「西歐スケッチ」など土田麦麩・村上華岳らの数10点を陳列)。 都市と芸術 191</p> <p>6・1～5 関西美術会展、岡崎第1勸業館に開催(加藤源之助の作品が特別陳列)。 日出 6・2、加藤源之助作品集</p> <p>6・8 早苗会30周年記念祝賀会、京都ホテルに開催。 都市と芸術 昭4・6</p> <p>6・8～10 早苗会展、第2勸業館に開催(山元春拳「雨もよう」、古谷一晁「永日」、庄田鶴友「富獄」、三宅鳳白「昆曲」、案本一洋「つくも髪」、玉舎春輝「西太后」など117点を出品)。 都市と芸術 191</p>	

参	考	日	本
(1)第10回帝展(京都関係のみ) 審査員	(日)西村五雲・(日)石崎光瑠・(日)橋本関雪・(日)登内微笑・(日)堂本印象・(洋)太田喜二郎・(日)木島桜谷・(日)水田竹圃・(工)清水六兵衛 会員出品	3・8 洋画家 児島虎次郎没(明14生、享年49)。大原孫三郎に協力し洋画を収集。	3・19～4・19 日本名宝展(読売新聞社)。
西山翠嶂「乍晴乍陰」、山元春拳「富士二題」 審査員出品	水田竹圃「絶壑飛泉」、堂本印象「木華開耶姫」、橋本関雪「長恨歌」、登内微笑「野火」、石崎光瑠「寂光」、太田喜二郎「藤花」 無鑑査出品	3・28 国宝保存法公布、6・29 国宝保存会官制公布、ともに7・1施行。	3・28 国宝保存会官制公布、ともに7・1施行。
土田麦麩「罌粟」、川村曼舟「山」、福田平八郎「南蛮黍」、小野竹喬「山」、山口華楊「杉」、井垣嘉平「くもる途」、鹿子木孟郎「一ツの林檎」、坪井一男「横臥裸婦」、龍村平蔵・河井寛次郎・伊東陶山・河村蜻山・迎田秋悦・沢田宗山・沼田一雄 推薦となった人	八田高容・大村広陽・金島桂華・山元春汀・小野竹喬・村上華岳・山口華楊・案本一洋・榊原紫峰・森月城・大河内夜江ら 特選受賞者	4・25 日本プロレタリア美術家同盟「P.P」結成(ナップ系ARと造型美術家協会の合同、矢部友衛、大月源二ら)。同6・6 ナップに改組、同9・3・28解散。	4・25 日本プロレタリア美術家同盟「P.P」結成(ナップ系ARと造型美術家協会の合同、矢部友衛、大月源二ら)。同6・6 ナップに改組、同9・3・28解散。
第1部 絵画	伊東深水「秋晴」、板倉星光「春雪」、畠山錦成「向日葵」、堀井香坡「夕風」、徳岡神泉「鯉」、小川翠村「残る秋」、荻生天泉「金釵鈿合」、勝田哲「天草四郎」、梅崎朱雀「春浅し」、矢野鉄山「孤琴涓潔」、福田恵一「重盛」、木村斯光「牢礼の義経」、菊池華秋「伝説星月夜」、菊沢武江「群鷄」	4・一 東方文化研究所、東京と京都に設置。	4・一 東方文化研究所、東京と京都に設置。
美術工芸	平館西「葡萄蒔絵手篋」 日本芸術院史	9・3～10・4 第16回院展(松彦「風神雷神」、古径「琴」、青邨「洞窟の頼朝」、御舟「名樹散椿」など)。	9・3～10・4 第16回院展(松彦「風神雷神」、古径「琴」、青邨「洞窟の頼朝」、御舟「名樹散椿」など)。
(2)第9回自由画壇展覧会	井口華秋「淀城の雨」・「大坂城の雪」、林文塘「春から夏へ」、西井敬岳「吹雪」、渡辺公観「比叡大観」、玉舎春輝「アイヌ村」、上田萬秋「雲去来」、松村梅叟「子の日御遊」、庄田鶴友「夕月」、広田百豊「秋高肥馬」、久保寛「銀鱗」・「壺」・「鶴」、和仁淵天崖「葵とホロホロ鳥」・「習作(伴奏の1部)」・「習作」、佐々木千早「習作3題(鹿ヶ谷)」・「習作3題(八瀬)」・「習作3題(馬場橋)」 日本自由画壇展覧会図録	9・3～10・4 第16回二科展(古賀春江「素朴な月夜」、小山敬三「アルカントラの橋」、福沢一郎のシュールレアリスムの作品を特陳)。	9・3～10・4 第16回二科展(古賀春江「素朴な月夜」、小山敬三「アルカントラの橋」、福沢一郎のシュールレアリスムの作品を特陳)。
		9・7 川端竜子(昭3日本美術院を脱退)青竜社を結成、第1回展を開く。竜子「鳴門」など。	9・7 川端竜子(昭3日本美術院を脱退)青竜社を結成、第1回展を開く。竜子「鳴門」など。
		10・16～12・11 第10回帝展(百穂「堅田の一体」、素明「嶺頭白雲」、院賞に松岡峯丘「平治の重盛」、前田寛治「海」)。	10・16～12・11 第10回帝展(百穂「堅田の一体」、素明「嶺頭白雲」、院賞に松岡峯丘「平治の重盛」、前田寛治「海」)。
		12・20 洋画家 岸田劉生没(明24生、享年39)。翌年6月遺作展。	12・20 洋画家 岸田劉生没(明24生、享年39)。翌年6月遺作展。
		この年	この年
		▷ 国定教科書の挿画は、全部色刷に改められる。	▷ 国定教科書の挿画は、全部色刷に改められる。

京 都 府	参 考 日 本
<p>6・26 京都商工会議所議員8人、同所に美術工芸部新設の建議書を会頭に提出。(主旨は京都の美術工芸の発展のためには、調査機関を設け、当業者の保護奨励を行なわなければならないという)。 日出 6・28、京都工芸産業の発達に就て</p> <p>6・一 上加茂民芸協団、作品第1回展覧会を京都大毎会館に開催。 民芸 166</p> <p>6・一 土田麦麿、パリ日本美術展に「朝顔」・「舞妓」を出品し、「舞妓」はフランス政府に買上げられる。 土田麦麿展目録</p> <p>9・1 京都美術青年会創立発会式。京都美術倶楽部に挙行(同会は京都美術倶楽部員によって、組織されている尚栄社組合員中の、40歳未満の店主家族店員により成立する親睦団体。講演会など開催)。 日出 9・2</p> <p>9・2 西山翠嶂、帝国美術院会員となる。 日本芸術院史</p> <p>9・一 津田青楓、第16回二科展に誕生50年を記念して、「夏の日」・「片脚をあげる裸婦」・「肘を曲げる裸婦」など30点を特別陳列。 二科30年、日出 8・31</p> <p>9・一 林重義、滞仏中の作品7点を第16回二科展に特別陳列。また会友に推される。 日出 8・31</p> <p>10・3、4 洛趣会第2回試作展、東本願寺釈穀邸に開催。 都市と芸術 昭9・11</p> <p>10・13~20 日本自由画壇第9回展⁽²⁾、京都商工会議所に開催。 書画骨董雑誌 245</p> <p>10・16~11・2 第10回帝展⁽¹⁾(徳岡神泉が「鯉」で特選となり画壇へ登場する。土田麦麿は「罌粟」で帝展に復帰する。福田平八郎「南蛮黍」は従来型の型を破ったものとして注目された。橋本関雪「長恨歌」、堂本印象「木華開耶姫」も話題作であった。11・27~12・11 京都陳列会を、勸業館に開催)。 日本芸術院史</p> <p>11・6~8 七星会新作画展、東京銀座美術園に開催。 都市と芸術 昭4・12</p> <p>11・13 京都商工会議所臨時議員総会で工芸部新設を決定(美術工芸という名称については、質疑応答の結果、美術工芸には絵画も含まれるという語弊から単に工芸部と称することに決定)。 日出 11・14</p> <p>11・30~12・4 第5回白亜会展、京都商工会議所に開催(出品作品53点、小品41点)。 第12回同展目録</p> <p>11・一 京都美術工芸展、岡崎公園に開催(京都選匠会、京都美工学院、昭和工芸協会の共催)。 第12回同展目録</p>	<p>11・一 南座、東山区四条大橋東詰に完成(1月着工、設計者白波瀬直次郎、鉄筋コンクリート造、和洋折衷)。 京都の明治文化財</p> <p>12・1~10 浅井忠遺作品展観、恩賜京都博物館に開催。 同展観目録</p> <p>12・14 市公会堂で大礼記念京都美術館建設委員会開催(美術館の位置を岡崎公園内に、使用目的は近代美術館であること、美術および美術工芸の展覧会には会場を貸与すること、建築設計図案は一般から懸賞募集することなどを決定)。 美術館年報 昭8</p> <p>12・一 竹内栖鳳・山元春挙・菊池契月・都路華香・西山翠嶂ら昭6・1からドイツ ベルリンで開催のドイツ日本画展準備委員に任命される。 日本美術年鑑 昭6</p> <p>この年</p> <p>▷ 京都大礼博に古美術展開催。 書画骨董雑誌 246</p> <p>▷ 中村鵬生、この年から7年間川島織物(株)図案部にあつて、染織図案と綴織を専門とする。 日本美術年鑑 昭35</p> <p>▷ 石本眺海、2年がかりで制作していた近江聖人中江藤樹の木像を完成。 日出 6・18</p> <p>▷ 京都装飾芸術協会第1回試作展を、東京三越呉服店に開催。 都市と芸術 196</p> <p>▷ 津田塾、機関誌『フェーザン』を創刊(学芸員の和辻哲郎・成瀬無極・中井宗太郎・土田杏村・谷川徹三・三木清ら寄稿)。日本の前衛絵画</p> <p>▷ 山口華楊、久邇宮家の天井画を描く。 山口華楊作品集</p> <p>▷ 村上華岳、この頃より画壇を遠ざかる。以後、制作するが公表はすくない。 華岳画集</p> <p>▷ この春、土田麦麿画塾、山南社を山南塾と改称し塾の規約を改正。 都市と芸術 189</p>

京	都	府
1・24～29 令煌社第1回展、大阪三越に開催 (小川翠村・川上拙似・福田恵一ら7名の組織する団体)。 都市と芸術 199		飼嘯谷「探湯」など出品。 都市と芸術 203、日出 5・26
1・一 七月会、民芸研究所を創設。 同上		5・24～26 第2回蒼翁会展、華族会館に開催 (川北霞峰「風景」、甲斐荘楠音「美人」など)。 都市と芸術 202、203、日出 5・26
2・一 五条会結成(五条清水在住の陶芸家が古陶器・古美術の研究・研究作品の展観・作品批評研究・講演会開催などを目的として結成、会長清水六兵衛)。 日出 2・6		5・25 久しぶりに後素協会の総会、北垣男爵邸に挙行。 日出 5・26
3・1 京都商工会議所工芸部、美術工芸作家保護奨励に關し市長に建議。 京都商工会議所史		5・25～26 吉川靈華遺作展、方広寺に開催。 日本美術年鑑 1931
3・1～5 西川草亭・津田青楓第1回日本画展、東京三越に開催。 日本美術年鑑 1931		5・一 『深田康算全集』第1巻、岩波書店から刊(全3巻)。 同書
3・20 日本工芸美術連盟発会式、都ホテルに挙行。 日出 3・19		5・一 津田塾主催、総合美術大講演会、岡崎公会堂に開催(「支那の近代生活とその芸術」内藤湖南、「新写実主義について」成瀬無極、「桃山時代」和辻哲郎、「芸術革命と絵画に於ける写実主義」黒田重太郎、「芸術の普遍性についての一考察」津田青楓)。 老画家の一生
4・2 京都商工会議所第1回工芸部懇談会開催(来賓:丹羽圭介・神阪雪佳・清水六兵衛ら出席、「京都工芸産業の発達について」討議)。 京都工芸産業の発達に就て		6・1～3 菁莪会展、第1勸業館に開催(水田竹圃「陰晴一半」など出品)。 都市と芸術 203
4・9 洋画家 船川末乾没(明19京都宇治生、享年45)。 日出 4・12		6・1～12 第31回早苗会展、岡崎勸業館に開催(出品数97、川村曼舟「静物」、案本一洋「燈籠大臣」、広本進「淵」、小村大雲「山の池」など出品)。 都市と芸術 202
4・13 彫刻家 中牟田三治郎没(明25福岡生、享年39)。 日本美術年鑑 1931		6・6～10 関西美術会展、岡崎第1勸業館に開催(出品80余点、その他須田国太郎の泰西名画の模写を陳列)。 日本美術年鑑 1931
4・25～30 第6回白亜会展、京都商工会議所に開催(出品作品71点、6月水清公子を会員に推挙。11・28～12・2 第7回展を同所に開催)。 第12回同展目録		6・7～9 第2回新樹社展、第2勸業館に開催(出品数100点、吹田草牧「春日山の晩秋」、甲斐荘楠音「紫君」、粥川伸二「長崎港」、榊原始更「風景」、徳力富吉郎「人形」、小松均「薄」など、また土田麦麿「ケシ」の屏風絵の下絵などを出品)。 都市と芸術 203
4・一 知恩院納骨堂、東山区新橋通り大和大路東入りに完成(昭3・12 着工、設計者は技師阪谷良之進、二重宝形造り本瓦葺、和様)。 京都の明治文化財		6・8～10 麦秀社第1回展、京都商工会議所に開催(同社は、浅木勝之助・島田洗耳堂・田中俊夫・中井平三郎・山本正雄らの洋画家が組織)。 日出 6・5
4・一 福田平八郎・山口華楊・猪原大草ら、市立絵画専門学校に派遣で中国へ渡る。 都市と芸術 208、山口華楊作品集		6・15～19 第1回日本工芸美術会関西展、京都商工会議所に開催(公募作品370点、入選47点)。 日出 6・15
5・16～20 津田青楓塾展、岡崎勸業館に開催。 日本美術年鑑 1931		6・24、25 川北霞峰塾蒼穹社第2回展、華族会館に開催。 都市と芸術 昭5・6
5・17～19 菊池塾第6回展、第2勸業館に開催(出品総数150点、菊池契月「麦」、磯田又一郎「山吹小禽図」、菊池隆志「カナカの娘」、松元道夫「狩」、大河内夜江「少女」などを出品)。 都市と芸術 202、203		6・一 京都家具工芸研究会創立(京阪神の学界権威者を網羅して、宮崎平七ら組織、9・21～23 第1回展を京都商工会議所に開催)。 京都工芸大観、都市と芸術 205、日出 9・20
5・23 美術史家 沢村専太郎没(明17・1・1 滋賀県生、享年48)。 哲学研究 171		7・1 市立美術工芸学校創立50年記念式挙行。 実業教育50年史、都市と芸術 204
5・24～26 第7回青甲社展、岡崎第2勸業館に開催(西山翠嶂「飢鴉」、堂本印象「花鳥」、山内信一「放牧」、上村松篁「軍鶏」、森守明「残寒」、三谷十糸子「独楽」、西村英雄「静物」、秋野不矩「休日」など出品)。 西山塾青甲社、日出 5・26、日本美術年鑑 1931、都市と芸術 202、203		7・11 清水六兵衛、帝国美術院会員となる。 日本芸術院史
5・24～26 青竹会展、第1勸業館に開催(猪		7・12 日本画家 井口華秋没(享年51、明13京都生)。 日本美術年鑑 1931、都市と芸術 204

参	考	日	本	
(1)第11回帝展(京都関係のみ) 審査員 (日)川村曼舟・(日)福田平八郎・(日)宇田萩郁 ・(洋)太田喜二郎・(日)土田麦麿・(日)矢野橋村 ・(工)沢田宗山 会員出品 竹内栖鳳「秋」 審査員出品 川村曼舟「秋雨一過」、土田麦麿「明粧」、福田平八郎「緋鯉」、矢野橋村「追啄」、宇田萩郁「流江清凌」、太田喜二郎「窓際」 無鑑査出品 徳岡神泉「月明」、中村大三郎「婦女」、堂本印象「実」、小野竹喬「風浪」、橋本閑雪「訪隠図」、石崎光瑤「笹百合」、鹿子木孟郎「北海道層雲峡」、井垣嘉平「眇の男」 推薦となった人 堀井香坡・徳岡神泉・徳田隣斎・小川翠村・田畑秋濤・福田恵一・小早川秋声・佐藤光華・榊原苔山 特選受賞者 第1部 絵画 板倉星光「春雨」、池田遙邨「鳥城」、松元道夫「雪霽」、福田豊四郎「早苗曇り」、小松均「くぬ木林」、三宅鳳白「花旦」、白倉二峰「深林暮色」、森守明「弘法大師」 日本芸術院史		2・一 二科会主催の日本アンデパンバン展、我国はじめての試み。 4・16 洋画家 前田寛治没(明29生、享年35)。 翌年1・17 遺作展。 4・23～5・4 春陽会第8回展、府立美術館に開催(森田恒友「春の池畔」、裕伊之助「南仏の道」、長谷川潔「田舎家の雲」など)。 4・26～6・1 ローマ日本美術展 ⁽⁴⁾ (大倉喜七郎主催、伊政府後援、大観「夜桜」・「飛泉」、栖鳳「蹴合」、百穂「荒磯」など出品。大観・百穂・映丘・御舟ら美術使節渡伊)。 5・10 日本画家 下村観山没(明6生、享年58)。 翌年2・21 遺作展。 6・27 黒田記念館を、帝国美術院付属美術研究所とする。 7・23～26 ベルリン日本美術展(昭6・1 開催予定)、出品作を公開。 9・3～10・4 第17回院展(古径「清姫」、靱彦「風來川人」、青郁「罌粟」、田中「五浦釣人」など)。 9・4～10・4 第17回二科展(安井「婦人像」、有島「熊谷守一肖像」など。林重義・向井潤吉・伊藤廉の渡欧作特陳、メカニズム、シュールリアリズムの作品も展示)。 10・16～11・20 第11回帝展(清方「三遊亭円朝」、麦麿「明粧」、平八郎「緋鯉」、六角紫水「曉天吼号之図漆器手箱」)。 11・1 独立美術協会設立(里見勝蔵・児島善三郎ら)。 11・5 大原美術館開館(大原孫三郎創立、岡山県倉敷)。 11・一 三越の七絃会なる。		この年 ▷ 社会的テーマが進出し、アカデミーの帝展においても、橋本八百二の「交代時間」が特選となる。 ▷ 帝国美術院規程一部改正(会員を30名に増加)。
(2)第10回自由画壇展覧会 林文塘「鯉」・「朝禮暮跪」・「しぐるゝか」、西井敬岳「朝鮮鬱陵島」、渡辺公観「秋圃」・「京洛十二景」・「河畔斜陽」、玉舎春輝「孔子」・「夕映」・「寒村」、上田萬秋「霜晨」、松村梅叟「鳥居5題」・「マスカット」・「夏の夕」、庄田鶴友「谷間の秋」、廣田百豊「競馬2題」、久保寛「紀州所見(鯛)」・「紀州所見(湯峰)」・「紀州所見(湯崎)」・「静物」、和仁淵天崖「宵祭り」 日本自由画壇展覧会図録				
(3)聖徳太子奉讃展 京都出品者 日本画 「新冬風景」森谷南人子、「道頓堀女」小川茂磨、「竅のほとり」佐々木楚冬、「妾の学校」金川明治、「春寒」諸永青晃、「草剪」興宗寺院小景、「大仏殿石垣」川喜多佳舟、「白梅紅梅」奥谷秋石、「瀑布」加地種月、「河畔」香川龍三、「春浅し」中村政造、「雪」沢田石民、「茶の花」林司馬、「少女」北添清峰、「暮早し」富永谷広、「雪の白川」荒木恒次郎、「早春」佐野蘆水、「浅春」山崎滴翠、「耶馬溪」木村杏園、「森の雪」千種掃雲、				

京	都	府
<p>7・15～17 廿日会第1回展、土井撰美堂に開催（同会は、市立絵専同期卒業生の団体、研究と座談を兼ねて毎月20日に会合する。7年前に成立。伊藤柏台「風景」、中村大三郎「人物」、山口華楊「若萩」、前田萩都「花ぐもり」など出品）。 都市と芸術 204</p> <p>7・25 大礼記念京都美術館建設応募図案審査、市役所貴賓室に開催（1等に東京の前田建二郎をはじめとする入選者を決定）。 美術館年報 昭8</p> <p>7・29 京都工芸美術協会創立総会開催（京都の各種美術工芸団体を統一する目的、帝展第4部に對抗すべき京都工芸美術展を毎年開催を企画）。 京都貿易史、日出 6・21</p> <p>7・一 京都美工院、制度を改正（毎年2回の展覧会を中止、無定期開催、院友制度および作品公募制の廃止、役員的全廃などを決定。迎田秋悦ら、時代に逆行するものだと脱退）。 日出 7・24、25、都市と芸術 205</p> <p>8・18 川北霞峰、市立美術工芸学校退職。 双葉</p> <p>9・5 堂本印象、市立美術工芸学校教諭となる。 同上</p> <p>9・25 京大出身の若き美学関係者ら、同人雑誌『美・批評』を創刊（昭9・10、32号まで、この日創刊記念会で講演があり、講師は園頼三・須田国太郎・中井正一ら）。 日出 9・19、思想 昭38・8、中井正一全集 2</p> <p>9・30 岩村貞次郎、市立美術工芸学校教諭退職。 双葉</p> <p>9・30 徳田隣斎、市立美術工芸学校兼市立絵画専門学校嘱託教員退職。 同上</p> <p>10・15 金島桂華、市立美術工芸学校教諭となる。奥村霞城・平館喜邦、同校教員となる。 同上</p> <p>10・16～11・20 第11回帝展^㉔（須田国太郎、太田喜二郎の勧めにより「発掘」を出品するが落選。11・27～12・11 京都陳列会を勧業館に開催）。 日本芸術院史</p> <p>10・25～31 第1回京都工芸美術展、第2勧業会館に開催（特賞6名「漆器鼓篁」西沢玉舟、「陶器翠影瓷草紋花瓶」河合栄之助、「創作版画小児遊虫」長永不屈、「緞纈染二枚折屏風ワーヤンブルク劇」上野隆正、「金鉄工手箱」黒井光珉、「陶器白華花瓶」清水正太郎、審査委員長：中沢岩太、審査委員：清水六兵衛・沢田宗山・河村靖山・鶴巻鶴一・萩原清彦・村上宇一・霜鳥正三郎・神阪雪佳・本野精吾）。 都市と芸術 206、日出 10・28</p>	<p>10・一 近畿漆工家協会創立（一般漆芸の研鑽、振興の為設立されたもの、委員長：迎田秋悦、委員：岩村哲斎・神阪祐吉・江馬長閑・三木表悦・鈴木表朔・安原祥窓・越田尾山・島野三秋、幹事：堂本五三良・徳力彦之助・奥村霞城・迎田嘉亭・平館齋・川口虚舟・会員：京都 井田宣秋らの他、大阪・高松・神戸の作家42名）。 都市と芸術 206</p> <p>11・11 京都高等工芸学校、松ヶ崎村の新校舎に移転。 京都高等工芸学校一覽、実業教育50年史</p> <p>11・15、16 京都美工院展、南禅寺金地院に開催。 都市と芸術 207</p> <p>12・16、17 猪飼嘯谷筆「大正御大礼絵巻物」（大4・11・22 宮内省より下命）完成し、京都御所に公開。 都市と芸術 208</p> <p>この年</p> <p>▷ 福田平八郎ら六湖会を結成（東京の中村岳陵・山口逢春・牧野虎雄・木村荘八・中川紀元ら参加。昭7、第1回展開催）。 福田平八郎</p> <p>▷ 三木翠山、久邇宮家御用画「愛鳥」（杉戸）を描く。 日本美術年鑑 昭33</p> <p>▷ 玉村方久斗、方久斗社を結成。 日本美術年鑑 昭27</p> <p>▷ 上村松園、春夏の屏風（喜久子姫御輿入れの御用品）完成。 都市と芸術 199</p> <p>▷ 野沢如洋、東京に移る。日本美術年鑑 昭13</p> <p>▷ 市立絵画専門学校絵画研究科卒業生の有志、東山会を組織（都路華香ら絵専の教授陣を顧問とし、勝田哲・辻宇左雄・上村松篁ら会員となる）。 都市と芸術 204</p> <p>▷ 美術家同盟、プロレタリア芸術研究所を西ノ京町に開所。 日本の前衛絵画</p> <p>▷ 徳力富吉郎・浅野竹二・麻田弁次の創作版画集、「新京都風景」（12ヶ月 12葉）、大丸美術部から出版。 都市と芸術 199</p> <p>▷ 陶芸団体、洛窯会創立（会長：沢田宗山、同人は若い作家達で占める）。 都市と芸術 207</p> <p>▷ 晴雲山仁松作「油滴天目茶碗」、東京博物館特別買上となる。 京都工芸大観</p> <p>▷ 三条会結成（三条栗田在住の陶芸家によって作られた陶芸研究団体、伊東陶山・宮永東山・楠部弥弼・道林俊正・伊東翠壺ら）。 京焼百年の歩み</p> <p>▷ 北脇昇、鹿子木塾より津田青楓塾に移る。 日本美術年鑑 昭27</p>	

参	考	日	本
	<p>「春水」白倉二峰、「雪晴」田村保喬、「残雪」高須白雪、「冬の野」立野雪郷、「春寒」直原放青、「猫」井上五郎、「冬の朝」堀陽陸、「田家冬日」小笠原清明、「思凡」三宅鳳白、「夏樹頌讚」梅原藤坡「風景」下村木甫 「南天」土屋旭華、「田家風味」村岡小丘、「小猫」・「店頭」山下薫、「屏風前の母」青木杏次郎、「雪に暮るゝ」石黒清房、「私の姪」下村龍園、「秋色風景」菅谷保三、「卯鷹」福田翠光、「野菜」新見虚舟、「水仙と実南天」奥村空蒼、「暮行く浮見堂」本庄陶苑、「鶉」浅井正臣、「鶉」片山清八、「たるあげ」長谷川慎一、「陸蒸気を見に」村上武三郎、「鞍馬村風景」鬼頭臺、「早春風景」八阪健、「故郷の家」沢宏靱、「寒村暮雪」小野寺梅丘、「霜枯の山村」奥村厚一、「鷺と雀」三輪超世、「蘇州城外」島田舟月、「或る日」菅谷丁乾、「暮薄」丸尾芝香、「むすめ」渡辺幾春、「けし」中島卯一郎、「黄鶯の早春」本多貞翠、「大池の秋」景三岡明、「山村雪後」藤田青木、「浅春」須賀田健蔵、「唐人お吉」瀬川艶久、「池畔」香川修二、「晩秋」加藤美代二、「風景」松山政春、「浴線の家」辻幸信、「蓮池」沖田溪水、「大和小景」竹内未明、「閑日」平高醒村、「清滝の春雪」山本朝光、「横たはれる女」辻富芳、「林の中」木村道治、「秋江暮煙」菊川南楊、「冬晴」幸田春耕、「麗春」土肥蒼樹、「ひなしげ」土肥武雄、「霜の朝」西畑起佐子、「晩秋に残る薫り」猪田青次、「鹿」松本正之、「寒沼」山田掬泉、「兎」森戸国次、「冬朝」野々口克己、「清滝の秋」竹原信三郎、「晩春」今尾景春、「浅春」稲葉春生、「合歓花咲く頃」森川青坡、「秋長」朝見香城、「一隅」広田多津、「洛東の山」和田善次、「夕風」岩田渠、「漁婦」小早川好古、「節子」玉城定一、「白ばゑ」柳田華紅、「秋」湯川三舟、「庄屋の家」渡辺石華、「早春の家」水谷楊生、「多度山の奥」寺本万象、「さわやか」樋口嚶子、「雨もよび」加藤晴彬、「山麓」大江誠一、「早春麗日」高山三路、「晩秋」中川正次、「風景」阪本音彦、「芍薬」水野深艸、「落葉する流」島田滴州、「大氏の庭」服部文幸、「雁」山本伝三郎、「春花」赤井龍民、「溪趣二題」川辺華堂、「白梅」吉田健蔵、「冬暖」木村響泉、「北越の冬」桜井考一、「椿花図」佐野光穂、「加茂の女」弘田志佳子、「後園」由里本景子、「双鷹」辻宇左雄、「秋趣」猪原大華、「冬暖」佐藤空鳴、「少女插花」四夷星乃、「静閑」奥村紅彩、「青梅」橋本虹影、「龍安寺」池田洛中、「白椿」中島多美、「阿佐兎岬観音」筒井清崖、「重盛」伊藤鷺城、「五月雨明」阿部寿朗、「札の森」富田溪仙、「雨後」堂本印象ら。</p>		<p>工芸</p> <p>「卓被綴織双竜文」中村鵬生、「葡萄紋乾漆壺」奥村霞城、「花瓶どくだみ文」河合卯之助、「吳須地草彩刻花瓶」内島北朗、「窯変鉄砂釉瓶」松田正一、「刺繍テーブルセンター」村田春緑、「化粧棚」鈴木貞治、「班馬」清水正太郎、「舟絵雲母地皿」浅見安兵衛、「蔦蒔絵」上原春光、「はしべ文化瓶」近藤悠三、「花瓶」新井謹也、「花瓶」浮田楽徳、「織手錦南瓜図卓被」田中貞造、「薫園手箱」堂本五三郎、「乾漆螺鈿唐菓子盆」平井香秋、「青瓷環耳花瓶」諏訪蘇山、「霜葉磁花盛器」伊東翠壺、「彩漆瓜張菓子盆」迎田嘉定、「乾漆飾壺」井田宣秋、「鋳銅壺」溝口安太郎、「草花紋菓子皿」浅見五郎助、「黄引釉花瓶」河合栄之助ら。 都市と芸術 200</p> <p>(4)伊太利展（ローマ美術展）</p> <p>出品者</p> <p>「猿」・「ベルシヤ猫」橋本関雪、「兎山朝露」・「嵐山の春」川村曼舟、「吉野山」・「高尾」宇田萩都、「鹿」・「風雪白鷺」榊原紫峰、「支那風景」・「闘雞」・「狗子」竹内栖鳳、「寒山遊鹿」・「瀟峽の初夏」山元春拳、「菊」・「太子」菊池契月、「水郷暮雨」・「鴨漚煙雨」都路華香、「母子」・「水禽」堂本印象、「豊稷」・「藤下孔雀」石崎光瑠、「鏡」三木翠山、「螢」・「伊勢大輔」上村松園、「献寿」・「錦秋」中村大三郎、「聖地の花」・「春の花秋の実」富田溪仙、「霜晨」真道黎明、「鷺」・「鹿」木島桜谷、「乍晴乍陰」西山翠嶂、「朝顔」土田麦穂、「鯉」福田平八郎、「兎」西村五雲。 同上</p>

京	都	府
<p>1・1 美術工芸団体、辛未会創立（個人的狹隘なる欲望を捨てて、作家相互間に研究をつくさしめ、合成的実力を作ることが目標。同人は、〔陶工〕新井謹也・道林俊正・河村喜太郎・八木一舂・楠部弥次、〔蒔絵〕堂本五三郎・久保金平・奥村霞城・魚野自醒・鈴木貞次・迎田嘉亭・徳力彦之助）。 都市と芸術 210</p> <p>1・28、29 麻田弁次・徳力富吉郎・亀井藤兵衛ら、女流木版画家ミラー嬢と共に、創作版画展を都ホテルに開催。 都市と芸術 209</p> <p>1・一 榊原紫峰、「雪中の竹に鳥」屏風完成。 都市と芸術 208</p> <p>2・28 北村西望・建島大夢、市立美術工芸学校彫刻科嘱託教員となる。 双葉</p> <p>2・一 籠神社拜殿・幣殿、宮津市大垣に完成（昭3・1 着工、設計者は神祇院技師角南隆、西殿とも一重切妻造り桧皮葺、神明造り）。 京都の明治文化財</p> <p>3・21～24 赤舂社展、八阪倶楽部に開催（同会は菊池塾の喜多川玲明ら塾生の同人の作品展）。 都市と芸術 211</p> <p>3・22～26 時習園工芸品展、大阪三越に開催（出品者〔陶磁〕沢田宗山・浅見五郎助・井本米泉・浮田楽徳・中谷小太郎・浅見隆三・和気亀亭・小川文斎・稲葉七穂、〔蒔絵〕平井香秋・井田宣秋・永野金泉、〔金工〕榎田光可・平野泰三、〔その他〕黒井光暁）。 同上</p> <p>3・25 陶磁器試験所第1回陶磁器研究会、同所に開催。 同上</p> <p>3・一 伊東壺壺、五条坂に独立始業。 京都工芸大観</p> <p>4・11、12 第1回染織祭、平安神宮前に挙行。 京都商工会議所史</p> <p>4・一 市立第二工業学校、建築装飾科を設置。 日出 2・5、実業教育50年史</p> <p>5・9～11 菊池塾第7回展、第2勸業館に開催（菊池契月「朱唇」、宇田萩萩「春の池」など出品数100余点）。 都市と芸術 212、213</p> <p>5・9～11 菁莪会展、第2勸業館に開催（水田竹圃「雨収溪漲」など約50点を陳列）。 同上</p> <p>5・16～18 第8回青甲社展、第2勸業館に開催（西山翠嶂「東山浴雨」など出品）。 西山画塾青甲社、都市と芸術 212、213</p> <p>5・16～18 蒼穹社展、植物園昭和図書館に開催（猪飼嘯谷「御献」など出品）。 都市と芸術 213</p> <p>5・23～25 早苗会第32回展、第2勸業館に開催（山元春挙「風景」など）。 都市と芸術 212、213</p> <p>5・28～6・1 第8回白亜会展、京都商工会</p>	<p>議所に開催（出品作品43点、7月松村綾子会員となる。11・20～24 第9回展開催）。</p> <p>第12回同展目録</p> <p>5・一 西村塾研究展、植物園昭和会館に開催（研究会で非公開ながら批評家など一部に公開、山口華楊「春宵」など出品）。 都市と芸術 213</p> <p>5・一 稲垣稔次郎、松坂屋を退職、以後作家生活に入る。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>6・1 日本陶芸協会、河原町三条東洋亭に発会式を挙行（同会は、京都の陶芸界の8団体が大同団結して大いに新工芸の進出を計り斯道の刷新を期す目的で設立したもの。総務河村蜻山。8団体：白陶会・耀々会・丹丘会・蒼玄社・觥々会・朱明会・自生会・新匈奴社）。 日出 6・1、都市と芸術 213</p> <p>6・1～ 第2回京都工芸美術展⁽⁹⁾、岡崎公園第2勸業館に開催（出品総数209点、特賞7名）。 日出 6・2</p> <p>6・19 京都商工会議所、陶磁器試験所第3部意匠図案部の機能拡張に関し商工大臣に建議。 京都商工会議所史</p> <p>6・一 鹿子木孟郎、アカデミー鹿子木大阪画塾を閉鎖。 鹿子木孟郎小伝</p> <p>6・一 新井謹也、支那満州地方を巡遊（8月帰国）。 京都工芸大観</p> <p>8・4 日本画家 都路華香没（享年62、明3・12・23 京都生）。 華香墨蹟</p> <p>8・24 菊池契月、市立絵画専門学校長事務取扱となる。 都市と芸術 214</p> <p>9・一 津田青楓が第18回二科展に出品した「ブルジョア議会与民衆の生活」が問題となる（同作品は空にそびえる新築の新議事堂と、その下に群がるみじめな民家が描かれ、作家のイデオロギーが問題となり、画面の下に貼布されたマルクスの言葉は撤回を、また題名も「新議会」と改名させられる）。 日本の前衛絵画</p> <p>9・一 各人社創立（総合美術団体、同人：稲垣耕四郎・辻村宗太郎・安田謙・岡本庄三・吉川常雄・中村三郎・森田富次）。第5回各人社展目録</p> <p>10・5 川村曼舟、帝国美術院会員となる。 日本芸術院史</p> <p>10・16～11・20 第12回帝展⁽¹⁾（京都陳列会は11・27～12・11 勸業館に開催）。 同上</p> <p>10・30～11・5 日本自由画壇展⁽²⁾、京都商工会議所に開催。 都市と芸術 217</p> <p>10・一 青年図案人連盟成立。 京友禪、図案年鑑 1</p> <p>11・14、15 京都創作家協会第1回展、京都美術倶楽部に開催。日出 11・12、日本美術年鑑 1933</p>	

参	考	日	本
(1)第12回帝展（京都関係のみ） 審査員 （日）西村五雲・（日）堂本印象・（洋）鹿子木孟郎・（工）沢田宗山・（工）伊東陶山・（工）迎田秋悦・（工）龍村平蔵 会員出品 山元春挙「しぐれくる瀨峡」 審査員出品 堂本印象「大原談義」、西村五雲「日照雨」、鹿子木孟郎「マドモアゼル・キタ」 推薦出品 土田麦僊「娘」、矢野橋村「大雅堂」 今年推薦となった人 板倉星光・池田達郎・森守明・荻生天泉・菊池華秋・伊藤小坡・勝田哲・山口玲照・三木翠山・庄田鶴友ら 特選受賞者 第1部 絵画 勝田哲「征旅（ジャンヌ・ダルク）」、前田萩萩「潮」、福田翠光「はぐくみ」、三輪超世「春丘」 彫 塑 松田尚之「懐心」 美術工芸 清水六兵衛「染付魚文盛花器」 日本芸術院史		<p>1・11～31 独立美術協会第1回展、府美術館に開催（児島善太郎「独立美術協会の門出」、中山巍「笛吹き」、林武「裸婦」、高島達四郎「プチ・ジャン」、三岸好太郎「馬に乗る道化」、里見勝蔵「肖像」、福沢一郎「ランファン・テリブル」）。</p> <p>2・13 洋画家 小出橋重没（明18生、享年47）。</p> <p>6・30 横山大観、帝室技芸員となる。</p> <p>9・3～10・4 第18回院展（大観「紅葉」、古径「髪」、御舟「女」、岳陵「婉賦水韻」、小茂田青樹「虫魚画卷」、佐藤朝山「鷹」、橋本平八「幼児表情」など）。</p> <p>9・3～10・14 第18回二科展（有島「大震記念」、青楓「新議会」、安井「ポーズせるモデル」・「外房風景」、山下新太郎「少女立像」、鍋井「奈良の月」、小出橋重・湯浅一郎の遺作を陳列）。</p> <p>9・7～11 日本版画協会結成（日本創作版画協会と洋風版画会の合同、岡田三郎助会長）、第1回展。</p> <p>10・1 日本画家 小堀鞆音没（元治2生、享年67）。</p> <p>10・16～11・20 第12回帝展（玉堂「鶉飼」、百穂「刈草」、五雲「日照雨」、満谷「早春の庭」、期間中物故作家展、11・1 文展創立25周年記念式挙行（竹内栖鳳・山元春挙ら美術功労者らに表彰される）。</p> <p>12・6 平櫛田中、「岡倉天心銅像」除幕式を東京美術学校前庭に挙行。</p>	<p>この年</p> <p>▷ 美術批評家 今泉雄作没（享年82）。</p> <p>▷ 国画会第6回展開催、平塚担当の版画部設置。</p>
↗ 12・27 南画家 池田桂仙没（享年70、元治元三重生）。 日本美術年鑑 1933、書画骨董雑誌 284		<p>この年</p> <p>▷ 6代清水六兵衛、陶磁器研究のため中国へ渡る（約1カ月北平滞在）。 京都工芸大観</p> <p>▷ 新興美術協会創立（会員：田中善之助・若山為三・国盛義篤、会友：川端弥之助・藤堂李三郎・斎藤清二郎らによって組織された洋画の団体）。 都市と芸術 215</p> <p>▷ 第1回独立美術協会京都展開催（以後毎年開催）。 日本の前衛絵画</p> <p>▷ ベルリン日本美術展出品画のうち、竹内栖鳳・山元春挙・西山翠嶂・上村松園らの作品をドイツ政府へ寄贈。 都市と芸術 210</p> <p>▷ 竹内栖鳳、この頃より病後療養のため湯河</p>	<p>↗ 原へ赴く（以後、幾度か帰洛するが、ほとんど居を湯河原にうつす）。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>▷ 京都から伊谷賢蔵、第18回二科展二科賞受賞者に選ばれる。 同展目録</p> <p>▷ 近藤浩一路、再び渡欧し、カモエン街の私邸で個展を開き、之を機縁にアンドレ＝マルロオ等の交友が始る。 日本美術年鑑 昭38</p> <p>▷ 堂本印象、御室仁和寺書院の襖絵を描く（「松に鷹」・「秋草」・「柳に鷺」・「旭日」・「桜花」など）。 堂本印象</p> <p>▷ 香取秀真、高山寺梵鐘を制作。 京都の明治文化財</p>

京	都	府
2・7～10 各人社第1回美術展、大丸に開催(出品75点)。第5回同展目録		6・4 第19回商工省工芸展、岡崎第2勸業館に開催。京都商工会議所史
2・13 清水六兵衛・清水正太郎・伊東陶山・伊東信助ら日本工芸美術会を脱会。都市と芸術 219		6・4～6 早苗会第33回展、第2勸業館に開催(三宅鳳白「南島瞥見」、案本一洋「朝鮮一瞥」、勝田哲「緑のつな」など出品)。都市と芸術 221
2・18 橋本関雪、画卷「木蘭詩」をボストン美術館東洋美術部に寄贈。同上		6・11～13 第8回菁莪会展、岡崎第2勸業館に開催。日本美術年鑑 1933、都市と芸術 221
2・24 山南塾大研究会展、六角会館に開催(第1席小松均「大原女」、第2席佐原修一郎「雪」、第3席猪原大華「椿」など)。同上		6・30～7・4 京都六大家紙本水墨画展、東京三越に開催。日本美術年鑑 1933
3・5～7 壬申会第1回展、八阪俱樂部に開催(京都の無鑑査級の集り、石崎光瑠「薰風」、堂本印象「正成」、金島桂華「南島印象」、勝田哲「ながれ」など出品)。同上		7・1～3 伊藤柏台遺作展、市立絵画専門学校に開催。都市と芸術 222
3・17～27 都路華香遺作展、恩賜京都博物館に開催。同上		9・19～21 須田国太郎、日本画家神坂松濤の紹介により最初の個展を東京資生堂に開催(里見勝蔵・川口軌外らの賞讃を得る)。須田国太郎
3・一 須田国太郎、京都帝国大学文学部講師となり、ギリシャ彫塑史概説を講義(翌年も)。須田国太郎		9・一 京都洋画協会設立準備会を開催(出席者:池田治夫・今井憲一・林幸一郎・浜野脩・西村五郎・小栗美二・奥田照子・仲千代二・藤井勇・三水公平・北協昇)。第3回同展目録、都市と芸術 228
4・21～23 西村塾大研究会展、植物園昭和会館に開催(西村卓三「日向葵」、奥村厚一「麦秋」など出品)。都市と芸術 220、221		10・16～11・20 第13回帝展 ⁽¹⁾ (福田平八郎「漣」は独創性に富んだ感覚的な画面であり、西村五雲「秋茄子」は洒脱な画境を示した。11・27～12・11 京都陳列会を勸業館に開催)。日本芸術院史
4・24 伊東翠壺、府の囑託として満州視察に出発。都市と芸術 220		10・17 鹿子木孟郎、多年の功勞に対しフランス政府より勲章シュヴァリエ・ド・ロドル・ナショナル・ド・ラ・レジオン・ドヌールを贈られ、伝達式が九条山関西日仏学館に挙行。鹿子木孟郎小伝
4・27～5・1 白亜会第10回記念事業として大毎会館に欧州絵画の百年展を開催(57作家、原作21点、複製126点、4・30「欧州絵画の100年」講演会を三条青年会館に開催、講師:黒田重太郎)。第12回同展目録		10・一 京都洋画協会、安井曾太郎・津田青楓を顧問に推薦。第3回同展目録
5・3～5 菊池塾展、京都美術倶楽部に開催(菊池契月「少女」、宇田荻郎「溪流」など出品)。都市と芸術 221		11・19～21 京都洋画協会第1回展、京都商工会議所に開催。都市と芸術 225
5・4～8 第5回津田青楓塾展、東京の東京堂に開催。日本美術年鑑 1933		11・22 金工家 2代秦蔵六没(安政1・9・19 京都生、幼名祝之助、享年79、妙満寺に葬る)。日本鑄工史
5・21～23 青甲社第9回展、岡崎公会堂に開催(西山翠嶂「調馬図」、堂本印象「父母恩重経絵」、山内信一「湖畔」、森守明「初夏」など出品)。西山画塾 青甲社、日本美術年鑑 1933、都市と芸術 221		11・一 芹沢・外村・悦孝第1回作品展、毎日新聞京都支局で開催。民芸40年
5・28 蒼穹社展、八阪俱樂部に開催。都市と芸術 221		12・28 陶芸家 15代永楽善五郎没(明13・11・28生、享年53)。京都工芸大観、都市と芸術 228
5・一 三宅鳳白、沖繩を旅行。同上		この年
5・一 案本一洋、朝鮮へ渡る(5・20 帰国)。同上		▷ 大北淡宰、天成書塾を開設し書道の開発に尽す。都市と芸術 昭7・10
5・一 中道軒、上京区烏丸通り丸太町上ルに完成(昭5・6 着工、設計者ヴォーリス、鉄筋コンクリートおよび木造、チュードル式。)京都の明治文化財		▷ 菊池契月、市立絵画専門学校校長兼市立美術工芸学校長となる。日本美術年鑑 昭31
6・3～7 第10回白亜会展、岡崎第2勸業館に開催(会員各自新作15点に旧作5点を加え各々20点を陳列、総作品225点、本回特別陳列として黒田重太郎回顧作品43点とクロード=ロオラン=プッサンの素描複製136点を展観)。第12回同展目録		▷ 土田麦麿、仏国政府より最高芸術功勞章オフィシエ・ド・ランストリュクシオン・ピュブリクを贈られる。都市と芸術 219
		▷ 小野竹喬、朝鮮へ渡る。都市と芸術 221

参	考	日	本
(1)第13回帝展(京都関係のみ)		4・一 武藤六郎ら新版画集団を創立。	
審査員		5・16 熊岡美彦・斎藤与里・高間惣七・橋本八百二・堀田清治、東光会結成。	
(日本画)		9・1～28 青竜社第4回展(電子「新樹の曲」)。	
川村曼舟・宇田荻郎・福田平八郎・土田麦麿・中村大三郎・水田竹甫		9・3～10・4 第19回院展(靱彦「挿花」、青邨「石棺」、御舟「花の傍」など)。	
(洋画)		9・3～10・4 第19回二科展(授賞を廃止。坂本「放牧三馬」、安井「薔薇」、国吉康雄「サーカスの女」など、山下新太郎・木下義謙らの滞欧作特陳)。	
鹿子木孟郎		10・16～11・20 第13回帝展(映丘「右大臣実朝」、平八郎「漣」、蓬春「市場」、藤島「大王岬に打ちつける激浪」、満谷「緋毛氈」)。	
(彫塑)		12・一 巴里東京新興美術同盟、フランス現代美術を輸入展観。	
松田尚之		この年	
(工芸)		▷ プロレタリア美術家同盟では作品11点を帝展に出品、全部落選。事変勃発と共に美術のファッション化や国粋美術の抬頭が問題にされ、日本画壇では復古主義が盛んとなる。橋本八百二の「戦友」に戦争画の出現をみる。しかし福沢一郎は独立展に「美しき幻想は至るところにあり」などを発表。	
清水六兵衛・龍村平藏・山鹿清華・沢田宗山			
会員出品			
西山翠嶂「くらべ馬」			
審査員出品			
宇田荻郎「竹生鳥」、水田竹圃「澄秋」、福田平八郎「漣」、鹿子木孟郎「大台ヶ原山中」			
無鑑査出品			
西村五雲「秋茄子」、徳岡神泉「漣」、堂本印象「冬朝」			
特選受賞者			
三谷十糸子「女」、岸本景春「両面刺繡潮衝立」、皆川月華「山海図服飾」	日本芸術院史		
(2)第12回日本自由画壇展覧会			
池田桂仙「蘆汀夜泊」・「竹窓聴雨」、林文塘「観桜」・「煙草のある静物」・「ある日の関心」、西井敬岳「夏の家」・「秋の溪」、渡辺公観「豫讓」・「玉兔搗菜」、玉舎春輝「綾服呉服」・「栗」・「山村」・「朝もや」、上田萬秋「花鳥四題」、久保寛「麻雀」、松村梅叟「大奴」・「嫁入前後」・「静物」、廣田百豊「果実と菓子」・「遊雞」、同人連作「京洛点描」一先斗町(林文塘)、芝居宵おれ(林文塘)、京の顔見せ芝居(林文塘)、保津川(西井敬岳)、加茂川の森(西井敬岳)、夜桜(和仁淵天崖)、大文字(渡辺公観)、大原女(玉舎春輝)、加茂川(玉舎春輝)、伏見人形(上田萬秋)、紫野(上田萬秋)、鹿ヶ谷と加茂(久保寛)、吉田社頭(久保寛)、伏見京橋口(久保寛)、一條戻り橋(松村梅叟)、祇園老妓と雛妓(松村梅叟)、春の動物園(廣田百豊)	日本自由画壇展覧会図録		

京	都	府
1・13 日本画家 岡本神草没(享年40)。都市と芸術 228		舟「阿里山」、案本一洋「南嶽」、勝田哲「エレベーター」など出品。都市と芸術 231
1・30 石崎光瑠、インドへ出発。同上		5・19、20、24 麦秀社展、京都商工会議所に開催(特別出品・故同人木母寺茂磨遺作)。都市と芸術 230
1・一 松田尚之、京都彫塑研究会を設立(京都における彫塑作家の相互研究と世人の彫塑芸術認識の普及が目的。会員は松田の他に岡本庄三・田中源三・矢野判三・鈴木清ら10名)。日出 1・11		5・25、26 竹杖会大研究会展 ⁽⁶⁾ 、植物園昭和会館に開催(月例研究会を少し大きい組織で開催。鳳賞徳岡神泉「松」、優作賞大矢峻嶺「風景」、同中田晃陽「多宝塔」など、他に竹内栖鳳「夏の家」出品)。都市と芸術 231
1・一 巴里新興美術展、市勸業館に開催(ピュウリスム・新造形派・キュビズム・シュルレアリスムなど最新傾向の実物作品多数を展示)。日本の前衛絵画		5・一 柳宗悦、東京小石川区久堅町に移転。民芸40年
2・7~9 千島の学術・琉球芸術展、大丸に開催(琉球は中川伊作の版画や陶器を陳列)。都市と芸術 228		5・一 土田麦僊、朝鮮に旅行(7月帰国、10月帝展に「平牀」を出品)。土田麦僊展目録
2・11、12 現代名家花鳥絵展、土井撰美堂に開催(富田溪仙・堂本印象・金島桂華・徳岡神泉・森守明・入江波光ら出品)。同上		6・3~5 第6回津田青楓塾展、京都に開催(5・18~22東京で開催)。都市と芸術 231
3・一 竹内栖鳳、ドイツ政府からゲーテ名誉章贈られる。日本美術年鑑 昭18		6・10、11 第2回新興工芸展、岡崎公会堂東館に開催。同上
4・8~10 山南塾展 ⁽¹⁾ 、京都植物園昭和会館に開催(吹田草牧「御苑内風景」、佐原修一郎「雨景」、松本碧水「春の雨」など出品)。都市と芸術 230		6・17、18 第5回蒼穹社展、八阪俱樂部に開催(甲斐荘楠音「裸婦」など出品)。都市と芸術 232
4・15、16 京都市芸同好会、第1回民芸品展を大丸に開催(同人は金関丈夫・菅吉暉・鈴木庸輔・中村直勝・山田保治・湯浅八郎、総316点)。民芸品展目録		6・25 松野奏風筆養福寺の襖並に杉戸絵完成。同上
4・27~5・1 第11回白亜会展、岡崎第2勸業館に開催(出品総数193点、特別陳列は黒田重太郎の作品14点とルネッサンスイタリア大家複製130点)。第12回同展目録		6・27~29 中村大三郎画塾展、大丸に開催。同上
4・29~5・1 西村塾研究会展 ⁽²⁾ 、植物園昭和会館に開催(奥村厚一「盛秋」、山口華楊「風光る」など63点を出品)。都市と芸術 231		6・一 松田尚之、京都彫塑研究所を東山通五条南入ルに設立。日出 6・4
4・一 故蜷川式胤50周年記念、市公会堂に開催(記念として『蜷川式胤追慕録』を刊行)。陶器全集		7・12 日本画家 山元春挙没(享年63、明5・15滋賀県生、等持院に葬る)。都市と芸術 232
5・3~5 菊池塾9回展 ⁽³⁾ 、第2勸業館に開催(菊池契月「友禪の少女」、宇田荻郎「鷹ヶ峰」などを出品。 ⁽³⁾ 都市と芸術 231		7・17~21 日本南画院京都展、岡崎勸業館に開催。都市と芸術 231
5・5~14 第20回商工省工芸展、岡崎勸業館に開催。日出 5・5		7・19 津田青楓、東京荻窪の画室で第20回二科展出品のための作品「犠牲者」(拷問)を制作中、杉並署の刑事に踏み込まれ留置される。老画家の一生
5・6~8 第10回青甲社展 ⁽⁴⁾ 、岡崎公会堂に開催(堂本印象「定朝」、山内信一「楡柳神社」、森守明「湖畔」など出品)。西山画塾青甲社、都市と芸術 231		7・22~26 京都(市)商工会議所および京都美術協会共同主催、京都工芸美術北海道展、札幌市今井商店に開催。都市と芸術 231
5・13~15 第34回早苗会展 ⁽⁵⁾ 、第2勸業館に開催(山元春挙「黒部の溪谷スケッチ」、川村曼		8・8 堂本印象筆東福寺法堂天井画「龍」完成し点晴式を挙る。日出 8・8
		8・26 津田青楓、二科会脱会を表明(油絵をやめて、池大雅的画境に親しむこととなる。津田青楓塾(京都)は既に解散。塾員の大部分は独立美術京都研究所に移り、須田国太郎に師事する)。京都洋画の黎明期、日出 8・27、9・4
		9・2 早苗会の代表者として川村曼舟を決定。都市と芸術 233
		9・19 西村五雲、帝国美術院会員となる。日本芸術院史

参	考	日	本
(1) 山南塾展出品	小松均「山波」・「牛」、片山俊二「母子」、松本碧水「春の雪」、松山政春「子供」、江龍白岑「袖」、内藤宗一「雞」、粥川伸二「舞妓」、猪原大華「水蓮」、吹田草牧「御苑内風景」、丸岡比呂史「秋の庭」、徳力富吉郎「城」、林司馬「女」、要樹平「路」、田淵富太郎「あそき」、佐原修一郎「雨景」、原田美智恵「娘」など。都市と芸術 230	3・10~31 第3回独立展、府美術館に開催。三岸好太郎「オーケストラ」など。	
(2) 西村塾研究会出品	山口華楊「風光る」、桜井孝一「雪どけの頃」、伊藤晃珠「高秋」、島津華山「七面鳥」、麻田弁次「女」、天野大虹「白い船」、田ノ口青晃「水温む」、中川正次「軍用犬」、菅谷丁乾「洛北小景」、前田荻郎「山村首夏」、西岡幸夫「竹の丘」、奥村厚一「盛秋」など。都市と芸術 231	3・27 日本、国際連盟脱退。	
(3) 菊池塾9回展出品	中川伊作「琉球の女」、赤井龍民「菟道の春」、竹村龍太「水鏡」、堀井香坡「鳥籠」、喜多川青岫「松林」、磯田又一郎「花曇り」、板倉星光「婦女」、登内微笑「湖畔の春」、長尾まさ子「お針の女」、谷聴泉「八郎瀉」、佐藤光華「舞踊の図」、野派平米「川」、松永蒼明「風景」、木村丈夫「緑雨」、松阪春久「滝」、梶原緋佐子「立女」、松元道夫「雪松」、山口玲燕「白牡丹」、菊池隆志「姉妹のモデル」、宇田荻郎「鷹ヶ峰」、炭屋義雄「楨」、菊池契月「友禪の少女」など。同上	4・1 重要美術品等の保存に関する法律公布。	
(4) 青甲社10回展出品	柳田華紅「日ざし」、富田秋邦「水禽」、佐倉五郎「裏通り」、山内信一「楡柳神社」、不染鉄二「温室」、小川翠村「雪」、高山完「燦秋」、本多貞翠「湖畔」、福田翠光「羽触」、上村松篁「冬暖」、福田恵一「龍馬と慎太郎」、今尾景春「いけす」、三谷十糸子「春」、川上拙以「母子」、堂本印象「定朝」、森守明「待春」、中村大三郎「女人像」など。同上	4・8 洋画家 森田恒友没(明14生、享年53)。	
(5) 早苗会34回展出品	山元春挙「スケッチ二題」、岡文濤「聴松籟」、川村曼舟「台湾所見」、勝田哲「エレベーター」、玉舎春輝「人物」、武田鼓葉「花鳥図」、植中直齋「鶴の宿」、山下竹齋「風景」、山本倉丘「花鳥」、案本一洋「南嶽」、古谷一晁「山水」、小村大雲「沙漠の夜」、小早川秋声「凍る北溝スケッチ」、三宅鳳白「麗春譜」、庄田鶴友「風景」、広本進「月宿嵐山」など。同上	5・30 帝国美術院美術展覧会規程中一部改正(特選後、次回の出品の際は鑑査外とする制度を廃し、鑑査を行なう)。	
(6) 竹杖会大研究会	(佳作賞) 柴原希祥「晩春の郊外」、浜田観「春昼」、小松華影「花」、小森秀之助「桜」、広田多津「春」		

京	都	府
<p>9・下 元津田塾の若い画学生ら、自主的な洋画研究所である独立美術京都研究所を四条河原町招徳ビルに設立(開所の小宴を林重義・須田国太郎をかこみ30余名で行なう。北脇昇・池田治夫ら中心。10月夜間部研究を開始、昭34・4廃止)。 日本の前衛絵画、市美術館ニュース 43</p> <p>9・一 吉田叙示、各人社に入会。第5回目録</p> <p>10・3、4 白亜会洋画小品展、大丸に開催(会員各自小品10点、総数160点、特別出品:黒田重太郎、出品者:飯田清毅・前田輝世・岩崎重雄・伊谷賢蔵・錦義一郎・柴田又太郎・中西倪太郎・山内善三郎・黒田孝子・松村綾子・水清公子・尾崎悌之助・渡辺造酒三・竹内喜助・伊庭伝治郎)。 同展目録</p> <p>10・5 蒔絵工芸家 迎田秋悦、兵庫県垂見の自宅で没(明14大阪生。名、嘉一郎。享年53)。 都市と芸術 234</p> <p>10・16~11・20 第14回帝展(橋本関雪「玄猿」、土田麦僊「平牀」など近代の名作が出品され話題となる。「玄猿」は政府買上げとなり、川村曼舟「阿里山の五月」は宮内省買上げとなる。11・27~12・16京都陳列会を京都美術館に開催)。 日本芸術院史</p> <p>10・17~31 黒田清輝遺作品展観、恩賜京都博物館に開催(デッサン・写生帖を含め百数十点を陳列、「昔語り」・「朝妝」・「読書」など)。 黒田清輝遺作品展観目録</p> <p>10・20~27 日本自由画壇展、京都商工会議所に開催。(6) 都市と芸術 235</p> <p>11・9 大札記念京都美術館、館長の諮問機関として美術館評議員会を設置。評議員9人を囑託(石田吉左衛門・飯田新七・西山翠嶂・富田溪仙・鹿子木孟郎・竹内栖鳳・植田寿蔵・清水六兵衛・菊池契月。この日同時に、館長事務取扱に市助役伊賀良一就任)。 美術館年報 昭8</p> <p>11・13 大札記念京都美術館竣工式、同美術館大陳列室に挙行(工費107万円、建築様式:日本趣味を基調とする近世式)。 同上</p> <p>11・21~26 第2回日本陶芸協会展、大丸に開催。 都市と芸術 236</p> <p>11・24 竹内栖鳳塾竹杖会研究会、都ホテルに解散式を挙行(明36創立、毎月例会開催し今日に至る。なお研究会の将来は、帝展推薦でない会員は、栖鳳の斡旋と本人の希望により、西山翠嶂・西村五雲・土田麦僊・上村松園・石崎光瑠の各塾に入り、推薦以上の会員は竹杖会員として従来通り師弟関係を結ぶ。また前記各塾員中で研究会に入会していた者は、所属する塾にあって専ら塾主</p>	<p>の指導をうける)。 日出 11・25</p> <p>11・27~29 京都美工院同人展、市公会堂に開催。 都市と芸術 236</p> <p>12・1~5 第2回京都洋画協会展、岡崎勲業館に開催。 第3回同展目録</p> <p>12・9 図案家 山本雪佳葬儀。 都市と芸術 237</p> <p>12・31 龍村平蔵、秩父宮殿下から依頼の壁掛の一部「天地逆旅」を完成(7年振り、銀箔地綴)。 日本美術工藝 357</p> <p>12・一 独立美術京都研究所、機関誌『トワール』を発行(北脇昇・今井憲一ほか64人の研究生の名前がのる)。 日本の前衛絵画</p> <p>この年</p> <p>▷ 山鹿清華、大破していた祇園会船鈴の見送りを新しく製作、今年の曳初から懸飾される。 都市と芸術 232</p> <p>▷ 上村松園「月花図」双幅(徳川家から高松宮へ献上するもの)完成。 同上</p> <p>▷ 菊池契月、市立絵画専門学校長を辞し教授専任となる。 日本美術年鑑 昭31</p> <p>▷ 西山翠嶂、市立絵画専門学校・市立美術工芸学校長となる。 日本美術年鑑 昭34</p> <p>▷ 上村松園、高松宮家御用画「春秋」を描く。 日本美術年鑑 昭22-26</p> <p>▷ 独立美術京都研究所の研究生指導に、東京から独立美術会員の児島善三郎・里見勝蔵・林武・田中佐一郎ら交替で来る(また学芸員の須田国太郎は「クールベの写実主義」などの公開日曜講座を催す)。 日本の前衛絵画</p> <p>▷ 京都美工院、この年限りで展覧会開催を中止。 雪佳遺作集</p> <p>▷ 清光会展へ土田麦僊「菊」・「芍薬」を出品する。 都市と芸術 230</p> <p>▷ 奈那久佐会結成(福村祥雲堂主催、京都の女流作家、生田花朝・西畑起佐子・梶原緋佐子・小松華影・秋野不矩・木谷千種・三谷十糸子らが同人となる。11・23、24八阪倶楽部で第2回展を開催)。 都市と芸術 230、236</p> <p>▷ 天成書塾が結成される。 都市と芸術 229</p> <p>▷ 橋本関雪、「進馬の図」完成。 都市と芸術 238</p> <p>▷ 教王護国寺小子房、南区九条町に完成(昭7着工、設計者は技師安間立雄、一重入母屋造り、唐破風玄閑付棧瓦葺、書院造り。堂本印象、襖絵と壁画を描く)。 京都の明治文化財</p>	

参	考	日	本
(7) 第14回帝展(京都関係のみ)		9・1	第5回青電社展、電子「竜巻」(連作「太平洋」第1作)。
審査員		9・3~10・4	第20回院展(大観「虫の音」、溪山「御室の桜」など)。
(日本画)	菊池 契月・堂本 印象・中村大三郎・伊東 深水・池上 秀敏・服部 有恒・宇田 荻邸・矢野 橋村・案本 一洋	9・10	洋画家 古賀春江没(明28生、享年39)。
(洋画)	太田喜二郎	10・16~11・20	第14回帝展(関雪「玄猿」、十畝「玄明」、堀江尚志「鯉」)。
(工芸)	清水六兵衛・伊東 陶山・沼田 一雅・迎田 秋悦	10・30	日本画家 平福百穂没(明10生、享年57)、昭10・10・7~10・23遺作展。
会員出品	川村曼舟「阿里山の五月」	10・一	藤島武二、台湾に行く。
審査員出品	中村大三郎「髪」、宇田荻邸「築」、案本一洋「朝風」、矢野橋村「借景画処」、太田喜二郎「鶏」	10・一	雙杉倶楽部発足。
無鑑査出品	橋本関雪「玄猿」、土田麦僊「平牀」、徳岡神泉「罌粟」、小野竹喬「はざまの路」、鹿子木孟郎「大台山中ノ溪谷」、河合新蔵「山村」	この年	
特選受賞者	谷角日娑春「洛北の佳人」、矢野鉄山「荒涼」、山本倉丘「菜園の黎明」、三谷十糸子「朝」、楠部弥弼「青華甜瓜文菱口花瓶」、伊東信助「陶製色絵八重葎文花瓶」	▷ 牧野虎雄主催の旺玄社展開く。	
		▷ 福沢一郎「リアリズム私見」(『みずゑ』3月号)。	
		▷ 二科会、創立20周年を迎える。	
		▷ 第8回国画会展(バーナード=リーチのETCHING、素描、陶器、家具など100余点が特別陳列)。	
(8) 第13回日本自由画壇展覧会			
	林文塘「朝歌」・「紗光」・「白雨・凍雲」・「文化に蝕まれ行く古都」・「静物」、西井敬岳「雲仙嶽の夏」・「寒霞溪の秋」・「阿伏兎観音」、渡辺公観「乃木無人」・「放牧」、玉舎春輝「磯辺」・「神苑の朝」・「秋の山」、上田萬秋「野鶴」・「山路」・「楠に倚る家」、久保寛「如是閑」・「温泉五題」・「静物」・「長閑」、松村梅叟「自笑軒」・「北野大茶」、佐々木拙庵「秋圃」・「残雪」・「行春」・「霜秋」・「秋」・「三友」・「鯉二題」・「桜」・「静物」・「鷹」・「麦」、広田百豊「徂く春」・「温泉」、同人合作「合作扇面屏風」		日本自由画壇展覧会図録

京 都 府	参 考	日 本
<p>1・15 坂本龍馬・中岡慎太郎両志士の銅像除幕式、円山公園東南隅に挙行。 日出 1・16</p> <p>1・24 書家 山本竟山没(文久3岐阜生、享年72)。 都市と芸術 238</p> <p>2・10、11 河合卯之助陶器展、京都美術館に開催(当展は美術館使用に許可された最初の展覧会である)。 美術館年報 昭9</p> <p>〔以後原則として大礼記念京都美術館を京都美術館と略す〕</p> <p>2・21 山鹿清華製作による東京宝塚劇場緞帳内覧会、京都美術館に開催(680名の招待者に内覧)。 同上</p> <p>3・29~4・2 第1回京都金属工芸展、京都美術館に開催(主催・京都金属工芸会)。 第1回同展目録</p> <p>3・一 須田国太郎、小林和作と共に独立美術協会会員に推薦される(須田は、同じくこの年会員になった田中佐一郎とともに、独立美術京都研究所の実地指導に当る)。 須田国太郎</p> <p>3・一 須田国太郎、第4回独立美術協会展に「ムセオの一隅」・「椿」・「法観寺塔婆」・「夜の清水寺」・「唐招提寺礼堂」など16点を出品。 同上</p> <p>4・8~12 日本画振興展、京都美術館に開催(東京美術時報社主催、入場者820名)。 美術館年報 昭9</p> <p>4・12 竹内栖鳳筆東本願寺大寝殿の襖絵完成。 日出 4・13</p> <p>4・12~16 第12回白亜会洋画展、京都美術館に開催(作品総数300点、特別陳列。黒田重太郎作品16点、アングル複製69点、ドーミエ複製45点)。 第12回同展目録</p> <p>4・一 東福寺本堂、東山区本町に完成(大6・11着工、設計者は工学博士天沼俊一、二重入母屋造り本瓦葺、禅宗橋)。 京都の明治文化財</p> <p>5・1~24 京都美術館美術展開催(開館記念のため、第1部日本画より第4部美術工芸に至る帝展、院展、二科会、春陽会、南画院、国画会、独立美術協会などの美術界の各派を網羅する全日本的な総合展である)。 美術館年報 昭9</p> <p>6・1~3 第5回京都工芸美術展、第2勸業館に開催。 第5回同展目録</p> <p>6・9~12 弘法大師1100年遠忌献書展、京都美術館に開催。 美術館年報 昭9</p> <p>6・10~12 山元春举遺作展、京都美術館に開催(入場数12,450名)。 同上</p> <p>6・13 宮崎友禅齋200年忌記念友禅祭、市公会堂に挙行(6・13友禅齋200年記念友禅展が日出新聞社主催で京都美術館に開催、内外不出の絶品など500点余を展示)。 日出 6・13、友禅展目録</p> <p>6・14~19 第13回日本南画院展、京都美術館に開催(「蛮野新月図」水越松南、「姑蘇城外」白倉二峰、「金剛四題」水田竹圃ら130点出品)。 美術館年報 昭9</p>	<p>6・24~28 府・市は商工省工芸指導所、商工省陶磁器試験所、京都市染織試験場の各工芸試作品展を京都商工会議所に開催。京都商工会議所史</p> <p>7・一 京都洋画協会 全会員、日出新聞連載「京を描く」を執筆。 第3回同展目録</p> <p>9・一 京都洋画協会、安田謙と田辺彦太郎を新会員に推薦。 同上</p> <p>10・13~22 第21回二科展京都陳列会、京都美術館に開催(出品394点、「ある種の肖像」有島生馬、「さくら」国枝金三、「晩桜」黒田重太郎、「金蓉」安井曾太郎、他に藤田嗣治・坂本繁二郎・東郷青児ら)。 美術館年報 昭9</p> <p>10・13~11・4 日本美術院第21回展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>10・16~11・20 第15回帝展^㉑(土田麦麿の「燕子花」が賞讃される。山口華楊「耕牛」、三谷十糸子「夕」、上村松園「母子」が政府買上となる。京都陳列会を11・27~12・16京都美術館に開催)。 日本芸術院史</p> <p>10・20、21 第8回染織刺繡美術工芸総工会展、京都美術館に開催。 美術館年報 昭9</p> <p>10・26~28 田中佐一郎帰国記念展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>10・27~29 第3回京都洋画協会展、京都美術館に開催。 同上</p> <p>10・一 青年図案人連盟、図案人連盟に成長、斯界最大の団体となる。 京友禅、図案年鑑 1</p> <p>11・8~10 鹿子木孟郎作品展、還暦記念展として京都美術館に開催。 美術館年報 昭9</p> <p>11・17~21 須田国太郎作品展、京都美術館に開催(同展は須田の京都における最初の個展である)。 同上</p> <p>11・20 土田麦麿、帝国美術院会員となる。 日本芸術院史</p> <p>12・6 京都美術館評議員会、第12回会議を開催(本年度帝展陳列品より同館買上を銚衛、次の6点を決定。「紅蜀葵」金島桂華、「森の梟」川崎小虎、「夏の海岸風」景高間惣七、「晴日寄港」石原義武、「坂上田村麻呂」山崎朝雲、「漆器簞ノ図手箱」奥村霞城、この金額4,000円)。 美術館年報 昭9</p> <p>12・27 京都陶磁器工業組合設立。 京焼百年の歩み</p> <p>この年</p> <p>▷ 猪飼嘯谷、京都市の依頼により明治神宮絵画館の壁画「御即位礼図」を描く。 日本美術年鑑 昭15</p> <p>▷ 石崎光瑠、印度に渡る。 日本美術年鑑 昭22-26</p> <p>▷ 第1回大衆向工芸展、京都美術館に開催(市産業部商工課主催、帝展入選作家が、安価な灰皿などを作って出品)。 都市と芸術 258</p>	<p>1・一 落合朗風ら明朗美術連盟をおこす。</p> <p>2・2~11 福島繁太郎コレクション展(ピカソ・マチス・ルオー・ルドンなど37点)。</p> <p>3・20~4・12 第4回独立展、府美術館に開催(川口軌外「少女と貝殻」)。</p> <p>3・一 日本プロレタリア美術同盟解散。</p> <p>4・一 国際文化振興会創立。</p> <p>5・16 洋画家 川村清雄没(嘉永5生、享年83)。</p> <p>5・一 国宝重美展、報知新聞主催。</p> <p>9・1 挿絵画家 竹久夢二没(明17生、享年51)。</p> <p>9・3~10・4 第21回院展(古径「孔雀」、橋本平八「牛」など)。</p> <p>9・3~10・4 第21回二科展(安井「金蓉」・「玉虫先生の像」など、藤田嗣治の滞欧作27点を特陳)。</p> <p>10・10 彫刻家 高村光雲没(嘉永5生、享年83)。</p> <p>10・16~11・20 第15回帝展(栖鳳「蛙と蜻蛉」、素明「炭窯」、翠嶂「牛買い」、松園「母子」、十畝「窮冥」など)。</p> <p>12・3 藤島武二・岡田三郎助・和田英作・香取秀真・清水亀蔵・帝室技芸員となる。</p> <p>この年</p> <p>▷ 久米桂一郎没。</p>
	<p>(1)第15回帝展(京都関係のみ)</p> <p>審査員</p> <p>(日本画)</p> <p>西山翠嶂・堀井香坡・金島桂華・案本一洋・福田平八郎・福田恵一・水田竹圃</p> <p>(洋画)</p> <p>太田喜二郎</p> <p>(工芸)</p> <p>清水六兵衛・山鹿清華・沢田宗山</p> <p>会員出品</p> <p>竹内栖鳳「蜻蛉と蛙」、西山翠嶂「牛買」、菊池契月「散策」、土田麦麿「燕子花」</p> <p>審査員出品</p> <p>福田恵一「主計頭清正」、堀井香坡「南島暮色」、案本一洋「水ノ尾村の秋」、水田竹圃「浣濯」、福田平八郎「花菖蒲」、金島桂華「紅蜀葵」、太田喜二郎「貴船の秋」</p> <p>無鑑査出品</p> <p>上村松園「母子」、橋本関雪「暮韻」、堂本印象「春泥」</p> <p>特選受賞者</p> <p>第1部 絵画</p> <p>西山英雄「港」、西村卓三「織工」、川上拙以「幽香煎茗」、菊池隆志「室内」、三輪晃勢「舟造る砂丘」</p> <p>美術工芸</p> <p>清水正太郎「銀欄文果物盛」 日本芸術院史</p>	<p>▷ 中国学者 内藤湖南没(慶応2秋田生、享年68)。 書道全集 25</p> <p>▷ 明石染人、鐘ヶ淵紡績(株)山科工場長となり、この年同社より研究・視察・蒐集のため、ヨーロッパ・エジプト・印度その他へ派遣される。 日本美術年鑑 昭35</p> <p>▷ 国盛義篤、春陽会会員に推挙される。 日本美術年鑑 昭27</p> <p>▷ 堂本印象、画塾東丘社を結成(昭13に第1回塾展を開催)。 堂本印象</p> <p>▷ 小村大雲、昨年帝展出品作「三蔵渡印」の図を仏教専門学校へ寄贈。 都市と芸術 昭9・2</p> <p>▷ 菊池契月・橋本関雪、帝室技芸員となる。 日本美術年鑑 昭19-21、昭31</p> <p>▷ 堂本印象、明治絵画館に「侍講進講」を描く。 堂本印象</p>

京	都	府
1・10～2・28 京都美術館、館所蔵品陳列展を創設。 美術館年報 昭10		会 ⁽¹⁾ 〔第1回市展〕、京都美術館に開催（本展は市青年作家の奨励を主旨とし日本画・彫塑および美術工芸にわたる総合美術展。搬入総数1,173点のうち入選790点、他に審査員および委員の出品を加えて総出品数839点、内訳は日本画460点、洋画239点、彫塑18点、工芸122点）。 美術館年報 昭10、日本美術年鑑 昭11
1・一 服飾美術会創立（同会は服飾美術専門の研究団体で綵工会同人が組織。毎月数回研究会を開き各地の百貨店に展覧会を開催する。会員：小合友之助・中村鷗生・山鹿清華・皆川月華ら）。 日本美術年鑑 昭12		5・一 太田喜二郎、紫野洋画研究所を開設。 太田喜二郎遺作展図集
3・10～25 京都美術館、近代日本画家展を開催（京都における明治以降物故作家人の優秀作132点を展示）。 美術館年報 昭10		6・1 竹内栖鳳・菊池契月・西山翠嶂・清水六兵衛・川村曼舟・西村五雲・土田麦麴・橋本閑雪・富田溪仙、帝国美術院会員となる。 日本芸術院史
3・17 京都商工会議所、国立工芸指導所設置促進委員会を設置（19日同所京都設置に関し、内閣総理大臣・商工大臣・大蔵大臣・貴衆両院議長に建議）。 京都商工会議所史		6・4～9 佳都美村工芸展、東京日本橋の高島屋に開催（京都における有力な工芸団体佳都美村の同人が製作した工芸品約120点を展観）。 日本美術年鑑 昭11
3・17 堂本印象、揮毫を依頼された信貴山成福院の貴賓殿宝雲閣襖絵30余枚のうち28枚を完成、大阪の篤信者から同院に献納される。 日本美術年鑑 昭11		6・7 京都在住の工芸家有志約30名、文部省の帝国美術院改組の措置に対し、文部大臣に陳情書を提出（沢田宗山・伊東陶山・河村蜻山・山鹿清華・宮永東山ら）。 同上
4・10～15 富岡鉄斎遺墨展、京都美術館に開催（生誕百年を記念して鉄斎画の大規模な展観を行なう）。 同上		6・20～24 第14回日本南画院展（出品点数144点）。 美術館年報 昭10
4・15～18 第6回京都工芸美術展、京都美術館に開催。 第6回同展目録		6・22～24 番浦省吾・奥村究果ら、健全な現代工芸美術の樹立を目標として型充社を設立。第1回展を京都美術館に開催。 第1回同展目録
4・16～23 春虹会第1回日本画展、東京日本橋の三越に開催（同会は京都の帝展系作家16名、院展の富田溪仙の17名を会員として組織される。第1回の出品数17点。石崎光瑤「春寒」・西山翠嶂「晴靄」・西村五雲「嵐雪」・富田溪仙「桜山吹」・堂本印象「春」・小野竹喬「稲」など）。 日本美術年鑑 昭11		6・一 小牧源太郎、独立美術京都研究所を訪れ北脇昇を知る。 日本の前衛絵画
4・25～29 白亜会第13回洋画展、京都美術館に開催（作品総数250点、本回より新たに招請出品制度を設ける。招請者13名。出品総数60点。特別陳列黒田重太郎作品25点、ルノアール作品複製35点）。 同展目録		6・一 京都図案家連盟設立（10月図案人連盟・図案家協会・美工図案院・農虹会の4団体により）。 図案年鑑 1
4・一 神護寺金堂、右京区梅ヶ畑高雄町に完成（昭7着工、設計者は府古社寺修理技手安井橋次郎、一重入母屋造り本瓦葺、各様折衷）。 京都の明治文化財		7・10 伊東陶山・河村蜻山・沢田宗山・宮永東山の4名、清水六兵衛と絶縁する旨の声明書を発表（京都市美術展における授賞問題、帝国美術院改組に対する清水六兵衛の態度を不満として）。 日本美術年鑑 昭11
5・1 京都漆芸会創立（漆芸家20数名が組織、顧問：神阪雪佳・清水六兵衛、会員：江間長閑・鈴木表朔・三木表悦・平館魯・堂本五三良・迎田嘉亭・奥村霞城・井田宣秋・湯浅守一・魚野自鯉・三木玉真ら、昭12・1京都工芸院の結成に参加し翌2月解消）。 京都漆芸会趣意書		8・23 彫刻家 石本曉海（曉曠）没（明21島根県生、名恒介、享年48）。 同上
5・8～14 第22回商工省工芸展、京都美術館に開催。 日本美術年鑑 昭10		9・5 土田麦麴、朝鮮に旅行（「妓生の家」の構想を練りながら江西・雙楹塚等の古墳壁画を見学し、模写を行い、11・12、京都に帰り草稿を完成し、12・2より本画に着手する）。 土田麦麴遺作展目録
5・20～6・13 第1回京都市主催美術展覧		9・10 京都在住の各種の新人工芸作家、新たな工芸の団体蒼潤社を組織（事務所上京区中野丸太町上ル、同人は染織7名・漆器6名・陶器8名金工2名の23名、伊藤翠壺・番浦省吾・小合友之助・河合栄之助・米沢蘇峰・中村鷗生・近藤悠三・清水正太郎・岸本景春・皆川月華ら）。 日本美術年鑑 昭11

参	考	日	本
(1)第1回市展 展覧会委員（○印は審査委員） 第1部（日本画） 石崎光瑤、入江波光、橋本閑雪、○西山翠嶂、○西村五雲、堀井香坡、○富田溪仙、登内微笑、小野竹喬、○川村曼舟、川北霞峰、金島桂華、○竹内栖鳳、○堂本印象、○土田麦麴、○中村大三郎、○宇田荻邨、上村松園、察本一洋、○福田平八郎、福田恵一、近藤浩一路、小村大雲、木島桜谷、榊原紫峰、○菊池契月、○水田竹圃		3・6～25 第5回独立展、東京府美術館に開催（海老原喜之助「曲馬」など）。 3・20 日本画家 速水御舟没（明27生、享年42）。9月の院展に遺作特陳。 4・28～5・17 第10回国画展（梅原龍三郎「桜島赤」、高田博厚「ロマン・ローラン夫人像」など）。 5・28 文相松田源治、美術界の挙国一致体制を整えるため、帝国美術院改組を発表。5・31 帝国美術院規定を廃し、帝国美術院官制制定、6・1 栖鳳、大観、藤島、安井ら同会員に任命。改組をめぐり美術界紛糾、特に旧帝展系作家に不満おこる。 6・15 彫刻家 藤川勇造没（明16生、享年53）。 6・一 長谷川栄作ら東邦彫塑院を結成。 9・3～10・4 第22回二科展（藤田嗣治「Y夫人の肖像」・「北平の力士」・「五人女」、宮本三郎「婦女三容」など）。 9・7～10・3 第22回院展（横山大観「飛泉」、小川芋銭「雲巒煙水」、武井直哉「プロフィール」など）。 9・一 松岡映丘を中心に国画院を創立。 10・15～11・10 旧帝展系洋画家、二部会を結成、第1回展を開催（小磯良平「日本髪的女人」、寺内万治郎「浴衣」など）。 11・1 彫刻家 橋本平八没（明30生、享年39）。 11・一 正木記念館、東京美術学校に成る。版画教室も設置。	
第2部（洋画） 伊谷賢蔵、伊庭傳治郎、池田治三郎、都鳥英喜、○太田喜二郎、○大橋孝吉、○鹿子木孟郎、河合新蔵、川端彌之助、○田中善之助、黒田重太郎、国盛義篤、寺松国太郎、霜鳥正三郎、森脇忠、○須田国太郎			
第3部（彫塑） ○石本曉曠、○国安稲香、○松田尚之			
第4部（美術工芸） ○伊藤陶山、○戸島光孚、○河村蜻山、河井寛次郎、○山鹿清華、○江馬長閑、○澤田宗山、○清水六兵衛、宮永東山			
第1部（日本画）22点 緑賞 猪原大華「後庭浅春」、池田栄廣「洋犬と洋猫」、石島良則「供饌」、西山英雄「廢船」、土肥蒼樹「春日」、加藤美代三「このま」、河合健二「五月」、竹村龍太「風景」、竹内鳴鳳「酔雨」、中野草雲「植物園新緑」、野添平米「山村遅日」、桑野博利「あさ」、山本蒼丘「七面鳥」、福田翠光「朝靄」、會津勝巳「春」、桜井孝一「春寒」、菊池隆志「喫茶店の少女」、北澤映月「娘」、水野深岬「遅日」、三輪晁勢「滞船」、三宅風白「徂く春」、衛藤晴村「朝」			
第2部（洋画）12点 緑賞 今井憲一「椿の春」・「黄檗山の禅悦堂」、飯田清毅「少女坐像」・「二人の女」、伴庄兵衛「白ひき」・「静物」、中西倪太郎「モドモワゼルS」・「聖堂」、榎信太郎「音羽谷瀧道」・「初夏」、東坊城光長「高尾溪流」・「紅いドレス」			
第3部（彫塑）4点 緑賞 岡本庄三「女」、吉川常雄「少女首」、田中源三「試作女」、中村三郎「布を持つ女」			
第4部（美術工芸）7点 紫賞 清水正太郎「果実文飾皿」			

京	都	府
<p>9・21～24 第1回新日本洋画協会展、京都美術館に開催（同協会は京都洋画協会を解散し、新たに独立美術研究所の中心メンバーで組織、賛助出品：須田国太郎・田中佐一郎）。 同会招待状、日本美術年鑑 昭14</p>		
<p>10・9 文部省、展覧会参与・指定などを発表（帝国美術院会員につぐ参与は、堂本印象・福田平八郎・上村松園・宇田荻邨ら。出品無鑑査の指定は、石崎光瑠・徳岡神泉・小野竹喬・金島桂華・中村大三郎・村上華岳・山口華揚・榎本一洋・榊原紫峰・木島桜谷・水田竹圃ら、2回だけ無鑑査で出品できる付則には、水田硯山・池田遙邨・勝田哲・上村松園・三谷十糸子・堀井香坡らが決定）。 日本芸術院史、京都画壇</p>		
<p>10・15～17 第10回菁莪会展（京都市の日本画塾の塾展で、「朝靄」水田竹圃会員その他の作品を展示）。 美術館年報 昭10</p>		
<p>10・15～11・3 京都美術館、帝展日本画特選展を開催（帝展日本画部において特選となった作品60点を展示）。 同上</p>		
<p>10・16 各人社第4回美術展、京都美術館に開催（出品点数63点）。 同展目録</p>		
<p>10・30～11・3 伊谷賢蔵洋画個展、京都美術館に開催（出品点数138点）。 美術館年報 昭10</p>		
<p>10・一 堂本印象作六曲一双「松鶴佳色」完成、大典を祝って岩崎家から献上される。 日本美術年鑑 昭11</p>		
<p>10・一 日本陶芸協会解散（河村蜻山を総務とし京都の陶芸家32名を会員とする同会は、帝国美術院改組以来会員間に意見の相違を生じ解散）。 同上</p>		
<p>10・一 河村喜太郎、実在工芸美術会に参加。 日本美術年鑑 昭42</p>		
<p>11・1～3 京都漆芸会第1回作品展、京都美術館に開催。 美術館年報 昭10、第1回同展目録</p>		
<p>11・21～12・1 第1回第二部会展、京都美術館に開催（同展は旧帝展第2部の無鑑査級大半を網羅して組織、陳列点数230点）。 美術館年報 昭10</p>		
<p>11・一 菁莪会、研究所（上賀茂坂口町蟻ヶ池畔）を設立。 日本美術年鑑 昭13</p>		
<p>11・一 第1回一樹社展、朝日会館に開催（一樹社は田中善之助・国盛義篤・川端弥之助らを中心とする春陽会の京都出品者が組織。事務所：左京区中町5川端弥之助方）。 日本美術年鑑 昭11</p>		
<p>12・4～6 独立美術第5回秋季展、朝日会館に開催。 同上</p>		
<p>12・10、11 朝鮮民芸展、寺町丸太町の新島会館に開催。 都市と芸術 256</p>		
<p>12・23 堂本印象作六曲一双「翱翔開運」の図、皇太子誕生を祝して制作され、衆議院議員一同から献上される。 都市と芸術 昭11・1、日本美術年鑑 昭11</p>		
<p>この年</p>		
<p>▷ 太田喜二郎ら、二部会結成に参加。 京都洋画の黎明期</p>		
<p>▷ 人形商 6代越後屋庄三郎没（号芦田）。 京洛人形づくし</p>		
<p>▷ 榊原紫峰『花鳥画の本質』（芸艸堂）刊。 榊原紫峰展</p>		
<p>▷ 第1回工画会展、京都美術館に開催（同会は昭9染織図案家が組織したもの。会員小合友之助・横山茨明・中村鶴生・梅原栄二路・山田恭三・佐藤久吉・平尾周叟、事務所：蛸薬師新町西入ル、梅原栄二路方）。 日本美術年鑑 昭11</p>		
<p>▷ 中井正一、美学・哲学・文学・歴史・経済・法律・自然科学などのメンバーを結集して、人民戦線的文化雑誌『世界文化』を創刊（昭11、34号まで）。 中井正一全集2</p>		
<p>▷ 中井正一、京大美学美術史講座の講師となり、芸術における主体性を講義。 京都百年 313</p>		
<p>▷ 玉村方久斗ら綜合団体新興美術家協会を組織（のち美術新協と改称し、毎秋公募展を開催したが、昭18、歷程美術協会、明朗美術連盟と合同した）。 日本美術年鑑 昭27</p>		
<p>▷ 上村松園、第1回春虹会に「天保歌妓」、第1回三越日本画展に「鴛鴦鬢」を出品。 日本美術年鑑 昭22-26</p>		
<p>▷ つる家庭園、左京区岡崎東天王町に完成（設計者は造園師加藤熊吉、築山林泉庭）。 京都の明治文化財</p>		
<p>▷ 千家関係十備会発足。 京都の美術工芸100年展目録</p>		
<p>▷ 染織業(屋号千切屋、千総) 12代西村総左衛門没（安政2・5・25 京都生）。 日本美術年鑑 明45、明治美術名作展目録</p>		
<p>▷ 関西美術会、市展開設により発展的解消。 京都洋画の黎明期</p>		
<p>▷ 京都美工院、佳都美村に再改称。 日本美術年鑑 昭11</p>		

参	考	日	本
<p>紅賞 小合友之助「染額双馬圖」、堂本五三良「花器鳥瓜圖」</p>			
<p>緑賞 伊東翠壺「繡彩草花文花瓶」、香浦省吾「華文彩漆隅棚」、浅見隆三「彫彩紋花瓶」、岸本景春「刺繡二曲屏風海月」 本会委員出品 第1部（日本画） 近藤浩一路「水郷初夏」・「新緑東山」、堀井香坡「伊豆の日蓮」、小村大雲「夕風」、福田恵一「山靄むる」、登内微笑「李樹」、川北霞峰「大嶋の春」、榎本一洋「葵上」、福田平八郎「鮎」、宇田荻邨「粟」 第2部（洋画） 伊庭傳治郎「五月の谷」、大橋孝吉「幼女像」・「深山溪流」、森脇忠「風景」、川端彌之助「秋光」・「若葉頃」、河合新蔵「津田の松原」・「放牧」、黒田重太郎「叢石湖風」・「牡丹」、伊谷賢蔵「婦人像」・「波切風景」、都鳥英喜「北の海」・「山村」、国盛義篤「ばら」・「青葉」、霜島正三郎「魚」、寺松国太郎「少女裸像」、鹿子木孟郎「中島博士像」・「新緑の森」、田中善之助「牡丹」・「舞妓」、池田治三郎「バラ」、須田国太郎「信楽」、太田喜二郎「衣笠山」・「春の川」 第3部（彫塑） 松田尚之「清浦伯爵像」・「憩」、石本眺曠「月」 第4部（美術工芸） 清水六兵衛「花籠壺」、澤田宗山「蝴蝶粘裏紅香爐」・「小田巻草花瓶」、伊東陶山「着彩四君子水指」・「燿變釉花匙」、戸島光孚「蓬萊仙鶴書棚」・「乾漆飾船花盛器」、山鹿清華「手織錦屏風立花」、宮永東山「青玄鳳凰圖花瓶」、河村蜻山「水指染付群鳥圖」 美術館年報 昭10</p>			
<p>(2)第14回日本自由画壇展覧会</p>			
<p>林文瑯「祭」・「塵塚」・「秋露」、西井敬岳「高原の秋」、渡辺公観「岬原の夕」・「残月の野」・「斜陽」、玉舎春輝「雨に煙むる下呂」・「中山七里二題」、上田萬秋「おのゝ笹原」・「苦舟」・「川おと」、廣田百豊「会釈」・「月夜」・「寒汀」、久保寛「洛北の少女」・「野沢温泉所見」・「新秋」・「鷺」・「錦魚」、同人連作「京洛名勝」、林正蔵「秋草」、岡野古泉「洛北の山」、岡本春草「春駒」、岡本憲一郎「芍薬」、金沢成峯「座女」、武藤章「春光」、真継慎一「有明」、前田蒼風「けいとう」、安島雨晶「瀨峡の宿」、荒木祥石「桜」・「紅葉の頃」、北村壽一郎「初夏の景」、南梅堂「鯉」 日本自由画壇展覧会図録</p>			